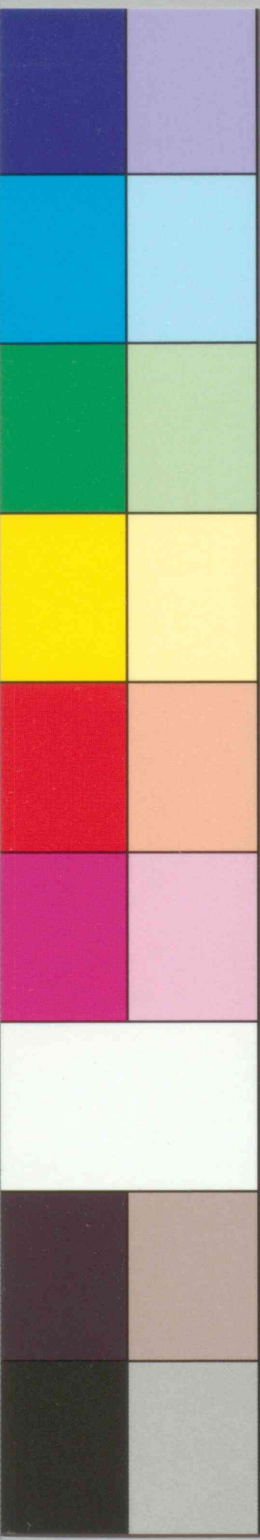


大正女子國文讀本

第二修正版

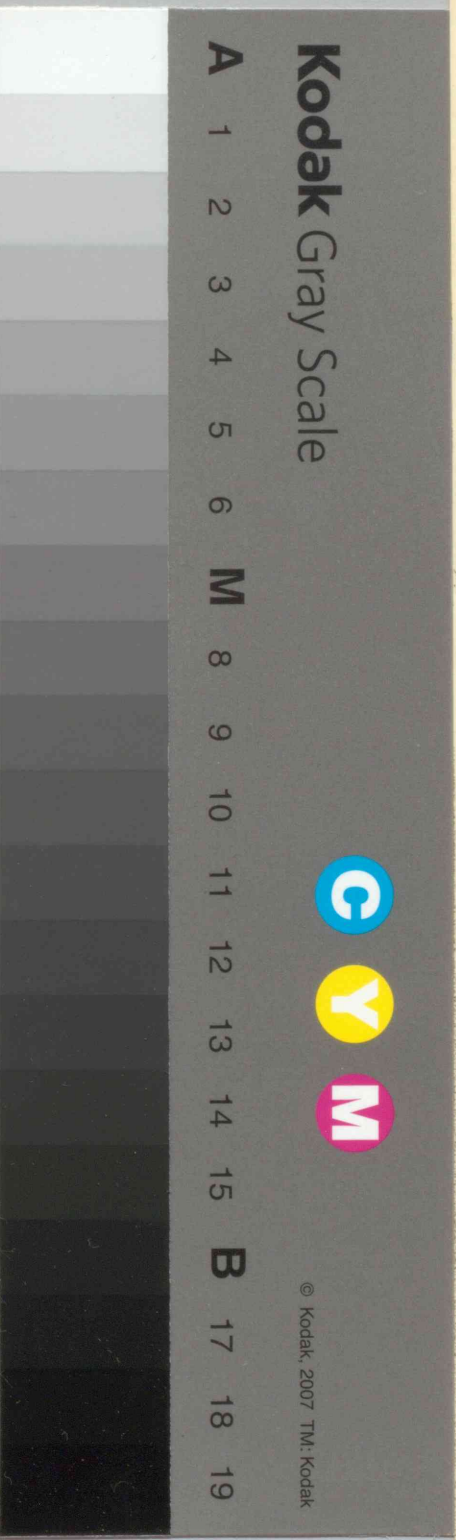
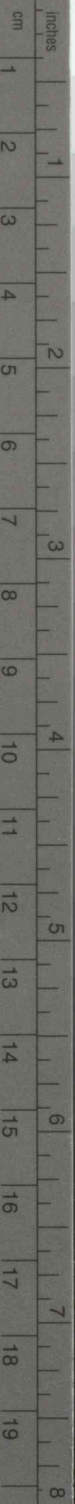
卷八

3759  
H<sub>o</sub> 19  
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42203

教科書文庫

4  
810  
42-1925  
20003  
01738



3759  
H019

保科存一編



女子國文讀本

東京 館社育英書院發行



大正女子國文讀本 卷八

目次

一	我が國民の特性……………藤岡作太郎……………一
二	國分寺の故址……………大類伸……………五
三	初瀬の夕……………徳富蘆花……………一五
四	長谷寺詣……………幸田露伴……………一八
五	船岡山……………(保元物語)……………三三
六	月二題…………………………三三
一	鹿ヶ谷法然院にて……………三木露風……………三三
二	月かゝりて空に……………福田正夫……………三三
七	紅葉の山……………(平家物語)……………三三

目次

一

八	碓氷より	徳富蘆花	四〇
九	秋窓雜記	北村透谷	四四
一〇	百蟲譜	横井也	四六
一一	秋のあはれ	樋口一葉	五一
一二	秋の夜	樋口一葉	五三
一三	雁がね	清水濱臣	五五
一四	砧の音	谷崎潤一郎	五七
一五	蘇州紀行	吉田兼好	六一
一六	徒然草抄	吉田兼好	六三
一七	堀池の僧正		六五
一八	入り立たぬ様		六七
一九	二つの矢		六九

四	高名の木のぼり		六六
五	鬼神は邪なし		六八
一四	いさよふ月	阿佛尼	七〇
一五	野村望東尼	佐々政一	七二
一六	詩二篇	與謝野晶子	七四
一七	わが髪		七六
一八	雪のたそがれ		七八
一九	菅公	高山林次郎	八〇
二〇	忘れ難き日	姉崎嘲風	八二
二一	朋友選ぶべし	(十訓抄)	八四
二二	無題録	大谷光瑞	八六
二三	新古今集の歌風	藤岡作太郎	八八



# 大正女子國文讀本 卷八

## 一 我が國民の特性

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯其の恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は、常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者は之に親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は、愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の綠日に、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅、カンテラの光に映えて、みづ／＼しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買

一 我が國民の特性

一

## 目次

二二	千遍讀……………	雨森芳洲……………
二三	梅花……………	小川未明……………
二四	ヴェニスの法庭その一……………	坪内逍遙……………
二五	ヴェニスの法庭その二……………	……………
二六	ヴェニスの法庭その三……………	……………
二七	曉の誕生……………	島崎藤村……………
二八	カルナバル祭……………	菊池幽芳……………

荒き猪云々  
徒然草にある  
兼好句  
鎌倉時代末か  
ら吉野朝にか  
けての文學者  
本姓吉田氏住  
京都吉田に  
んだので吉田  
を氏とした。

求めて、座敷に飾り庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窓前にも、稗蒔作りて田舎の景色の面影を偲び、破鉢に唐芋を育てて優しき野趣を楽しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛すること斯くの如きは、他の國民に其の匹ありや。我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「荒き猪も、ふするの床と稱ふるにやさしく聞ゆ」など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば、照りつゝきたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも、十日の照りより飽きくするに、卯の花くだし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

源氏物語  
紫式部の著し  
た小説。五十  
四帖

自然の愛は斯くして表はるゝのみならず、其の名を借りて屢、人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に、夕顔末摘花、葵、神朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等あり。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など、枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも、福壽草、白梅、阜月、あやめ、萩、紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり。尊重する者には悦んで服従す。彼等は漫りに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは、不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは、從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは、毫も抑壓の念を其の間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。

花に對する我等の趣味が、如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の麗しきにあらず、花一輪の色艶やかに香芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に渡り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝も其の儘に願はくは之に置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上に振撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との差あるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ・ピアシンスなど、其の葉に何の趣もなくして、其の花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、其の花に何の美しきことかある。されどあるかな

藤岡作太郎

金澤の人で東  
國と號した。  
國文學者で文  
學博士である  
東京帝國大學  
文學部の助教  
授であつたが  
明治四十三年  
歿。年四十一

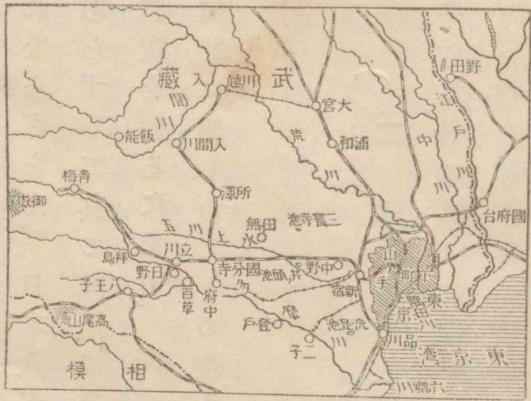
きかの黄花を捧げて、たよくと下蔭の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色はやがて白くほゞけて、露に濡れ風に靡く趣、いづれかあはれならざらん。日本人が花を愛するは、其の外形にあらず、賦色にあらずして、其の風情にあり。直ちに自然の懐にわけ入りて、其の眞意を握るにあり。斯くしてこそ自然を愛し自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

(藤岡作太郎氏國文學史講話に據る)

## 二 國分寺の故址

千年も昔の人々に就いて考へて見る。彼等は我等の祖先であつた。奈良朝から平安朝に亘つて生きて居た祖先であつた。千年の歲月は數へて見れば随分と長いものである。十年以前と今日とを較べて見ても、我等の周圍が如何に變つたか、否我れ自身すら

西の郊外  
東京の西部の  
郊外



もどれ程變化したかを考へて、千年に亘る長い間の變遷を顧みれば、陵谷の變といはうか、何といはうか、誰しも其の著しい變化に驚かないものはあるまい。固より考へ方によつては、天地・山川・草木・自然の姿に、著しい變化の認められないやうに、人間の世の中も大した變化は無いともいはれる。昔の人も今の人と同じ考へて家を建て、田畑を耕し、同じやうな考へて道も歩き、自然の風物を眺めて居たに相違ない。自然の悠久なるが如く、人も亦悠久なりとはいはれないでも無し。

このやうな二つの考へに彷徨しながら、秋晴の或日西の郊外を歩き廻つて居た。作物のよく實つた畑の間を行けば、そこ、到る處

國分寺  
武蔵の國分寺  
をさす。北多  
摩郡國分寺村  
大字國分寺

に瓦の破片がある。それは好古家連中が布目の瓦と云ふもので、いづれも古くは一千年乃至五六百年以前のものである。我等が日常見る普通の瓦とは違つて、非常に厚い、そして荒い細工のものである。すべてが破片のみであるから大さは判明しないが、破片から推して考へれば、頗る大きかつたことが想像される。否古瓦の採集家や學校の標本室などを尋ねれば、完全に近い形のもものが多く見られる。それは確かに大きなもので、中には立派な唐草模様を持つたものもある。見廻せば附近二三町の地域に亘つて、諸處にそれ等の瓦の破片が堆く積上げられ、又畑中に散亂して居る。そこは一千年の昔に、國分寺のあつた場所だと云はれて居る。いふまでもなく、瓦は國分寺の瓦なのである。

國分寺の遺蹟は諸國にある。そして此の布目瓦に依つて其の遺蹟たることを實證して居る。尙それのみでない、そこには屢、巨大

な礎石が多く發見される。それによつても古代の遺蹟たることは明かである。東京の近傍では、府中町の北方の武藏國分寺址、市川の北の下總國分寺址、厚木町の北四里許の相模國分寺址等、數へたてれば數多い。

秋晴れの一日を郊外の散策に遊び暮さうとする私は、今この武藏國分寺の遺蹟に立つて、その由緒來歴を考證したり、實地踏査上の研究をしようとするのではない。暖い午後の日當を受けて、風も吹かぬのに軽く穂先の搖ぐ武藏野にふさはしい薄や、風情ありげに低く地に垂れた松の枝ぶりや、而して千年の古蹟たる誇を、我等後世の人々に示すべく建てられた太い標柱や——それには武藏國分寺址と大書してある——それらを見れば、考證と研究との廻りくどい徑路を踏まずとも、直ちに我等は古蹟の氣分になつてしまふことが出来る。否我等は、直に歴史の生命をつかむことが出

來よう。

同行の I 君は、指しながら云ふ。

「この小高い丘のみが國分寺址ではない。三町餘も隔つた彼處の杉林も、尙又彼方の畑中も。そこにはいづれも大きな礎石があり、古瓦の破片が堆く積まれてある。」

と。見渡せば千年の古刹國分寺は、可成に大規模なものであつたに相違ない。現在の國分寺ですらも、丘上より麓に亘つて建てられた堂舎の地域は、決して狭いものではない。確かに巨刹といはれよう。しかし王朝の國分寺の遺址は、更に遙かに廣大である。その間には幾町歩の畑があるか、又杉林があるか、幾軒の人家があるか。廣漠たる人煙稀な武藏野は、宏壯な堂塔伽藍の建て連ねられた千年の昔には、確かに人目を驚かすに足るものがあつたらう。殊に周圍の民家は、それこそ東路の埴生の小屋で、現今の農家など



より遙かにく見苦しいものであつたらう。そして現今より遙かに壯大な大伽藍の聳えたのであつたから、兩者の對照は益々著しい差異を示したに相違ない。

瓦の破片の一つを見ても、その厚さ、その大きさ、その粗雑さに於て、何となく悠揚として迫らぬ大きな氣分が十分に窺はれると思ふ。殊に往々發見される唐草模様の形を見れば、古拙の間に、云ひ知れぬ力と偉大さが發揮せられて居る。その上に汚れた灰色の破片にも、のびくした古代の人の心が、十分に打出されて居るかと思ふ。そしてこの路傍にころがる土塊に等しい一片も、我等の心を牽きつけねばやまない強い魅力を持つて居るのである。更に、半ば土中に埋れた礎石を見給へ。自然石のまゝに、多少の人工を加へたに過ぎない不細工の石ではあるけれども、三尺より五尺に及ぶ其の一大石塊は、その不細工なだけ、それだけ一種の力を示し

てゐるやうに思はれる。古代の人は技術に長じて居なかつた。幼稚な技巧の外に出ることの出来なかつた彼等は、勢ひ石を刻むにも拙劣であつたらう。そして自然石のまゝの不恰好な巨石に多少の加工をして、その儘大建築の土臺石としたることと想像される。

しかし我等は、そののみで古代を説明するに満足出来ない。幼稚なる技術、粗笨なる思考、それらは固より認めなければならぬけれども、更に我等は、そこに大きな古典的氣分を味はざるを得ないのである。

古代の人々は現代人の如く經濟を口にしなかつた。彼等も全然經濟的事項から離れては生存し得なかつたには相違ないが、しかし少なくとも經濟を以て人間の中樞に祀り上げる事はしなかつた。總てを現實的に實利的に考へなかつた彼等には、經濟に左右

されるやうなこせくした考は起らなかつた。否、彼等といへども、實利的に考へたには相違なからうけれども、生活に餘裕のあつた彼等は、一々物質的經濟的の必要の前に膝を屈する必要が無かつた。これ等の事情は、彼等をして現代人の頭には必要以上の無用の事と思はれる洪大な事業を企てしめた。古典文化の大きな味ひはそこから生れて来る。それ程までに巨大な礎石を用ひずとも十分であるのに、彼等は極めて大きな石塊を運んで来る、そして其の偉大な外觀によつて、礎石の永久不變と建物の不朽と、更に彼等自身の事業の久遠に記念されんことを期したのであつた。千年以前の人間は、彼等自身それを口にしかどかはどうかは知らない。しかし私はかく信じて疑はないのである。その偉大さは彼等の信仰であつた。否、彼等の力であつた。現代は餘りに目まぐるしい。餘りに餘裕がない。經濟の權威の

前に跪いた現代の文化は、實に窮屈なものとなつてしまつた。猫の顔ほどの土地も利用しつくされ、無住無主の土地なきに至つた現代から考へれば、今眼前に展開された廣袤數町に亘る大伽藍は餘りに不經濟である。無用の土木を起したものだとの非難も起らう。しかしそれは大海を知らない井蛙の見である。千年の昔、そこには大きな古典の世界があつた。そしてそこには或偉大なる勢力の支配があつた。たとひそれは専制であるにもせよ、古典の世界は確かに偉大であつた。經濟の觀念は、民主平等の思想と提携して、此の偉大な世界を破壊してしまつた。餘裕のあつた大きな世界は、徹底的な、併し窮屈な思想のために壓倒されてしまつた。誰かそれを惜まないものがあらう。私は決して現代を千年の昔に還さうとは云はない。しかし千年の後まで我等の前に遺されたこの瓦の破片、この大きな礎石、乃至

ニーチエ  
ドイツの哲學者

大類伸  
文學博士  
史學者

この廣い古寺の遺蹟は、何を我々に語つて居るのであらうか。没落と破壊と、千年の歲月が齎した運命を、當然の運命と甘じて受けて居るに相違ない。たゞ彼等は彼等を造つた千年前の人間——我等の祖先を忘れてくれるなと我等に要求して居るのである。私はそれに相違ないと思ふ。土地と生活とに餘裕があつたと共に、思想にも餘裕を持つてゐた古典の人々の生出した、偉大な文化を尊重せよと、要求して居るのではあるまいか。惡平等と凡庸跋扈の時代には、ニーチエでなくとも超人を思はずには居られない。現代生活に取つて古典と餘裕とは缺くべからざる要求である。私は瓦の散亂した、巨大な礎石の點々散在する、この國分寺址に立つて、千年以前の人間に一層の親しさを感ぜざるを得ないのである。

(大類伸——歴史と自然と人)

三 初瀬の夕

耳梨山 奈良縣磯城郡耳成村に在る。大和三山の一。  
天香久山 同縣同郡にある。三山の一。  
櫻井 同縣同郡。  
初瀬 同縣同郡に在る。奈良市の東南六里三十町。  
長谷寺 初瀬にある。眞言宗豐山派西國三十三箇所第八番札所

耳梨山を左に天香久山を右に見て東走し、櫻井で汽車を下りると、すぐ初瀬行の輕鐵に乗換へる。輕鐵の小さな客車は櫻井から東を指して、がた／＼と二十分許り谷間を上つて、終點初瀬驛に着く。車で石ころの坂路を挽上げられて、初瀬の町は紀の國屋の店頭に信玄袋をおろすと、すぐ其のまゝ長谷寺にいそがす。もう秋の日は落ちかけて居る。爪先上りの初瀬町の往止りて車を下る。西に折れて、石甃を歩いて仁王門に入る。すぐ廻廊の屋根下である。緩勾配の石段が次第に上方に導く。數間置きに、金輪の燈籠が下つて居る。廊の左右は、玉石を疊んだ牡丹の花壇が續いて居る。長谷寺の生命は此の廻廊にあるのだ。長い長い廻廊は、仁王門から西に攀上つて北に折れ、暫く上つて又西北に折れ、斯くて本堂に上り着いて居る。百九間半、四百幾十の石段を上り果てて、山腹

西行法師

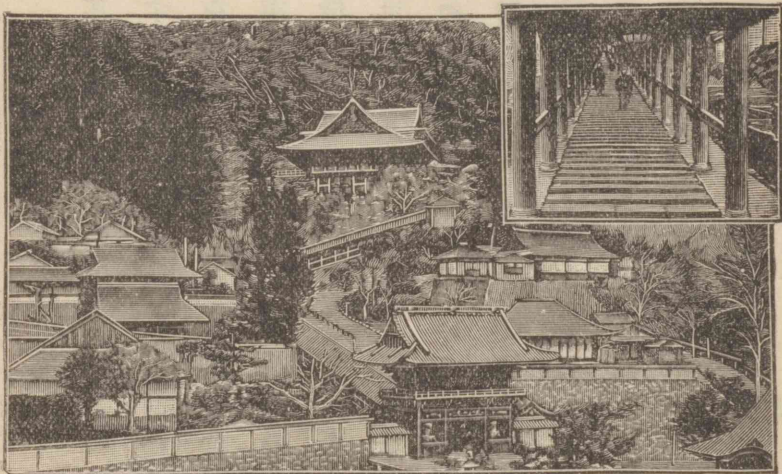
源平時代の歌僧。俗名佐藤義清。旅行を好み天下を行脚す。

本尊

十一面観音

鎌倉のと云々

神奈川県鎌倉市大谷町。本尊十一面観音は、大和の長谷の観音と同一の木で作つたもの。



長谷寺と廻廊

に建てられた本堂の舞臺に出た。世を捨てた西行法師が、捨てられて尼になつた昔の妻に、ゆくりなく廻り會うたは此處であつたのか。本尊の観音様は後にして、まづ舞臺の端から見下す。向ふの山も此方の山も、燃えに燃立つ焔の山かとばかり、紅葉は今眞盛りである。初瀬の町は赤地錦の袋に包まれて、其の底に横たはつて居るのである。もうほの闇い内陣に、鎌倉のと同作の観音様など拜ませてもらふ

大正二年

作者の参詣した年

玉鬘

源氏物語中に出る女性の人物。同物語中の人物夕顔の遺兒、後に主人公源氏の養女となり、鹿黒の大將に嫁す。

て居る内に、日は落ちてしまつて、焔の山は紫に暮れ、蒼い朦朧の漂ふ谷に響いて、入相の鐘が鳴りはじめた。其の鐘の音に送られながら、我儕も廻廊の降口にかゝる。烟の如く立迷ふ黄昏をほのかに照らして、廻廊には最早燈籠に灯が入つた。黙つて其の灯の連續を見下して居た我儕は、やがてほのかな其の光をたよりに、一段一段廻廊の石段を下りはじめた。得も云はれぬいみじの薄あかり。此處に大正二年はない。どうしても源氏物語から拔出して來た白い顔の玉鬘か、さなくば、さし俯く墨染の西行が上つて來なければならぬ。美しい者、あはれ深い者に出遇ふ期待を何處やらに漂はせながら、我儕は一段々廻廊を下るのである。時々立止つて後を見返ると、昔から限らない人の炷いた心の香が、一つに融合うて作つたかと思はれる薄青い朦朧を見せて、ほのかな火がぼつりぼつり上へくと上つて居る。下の方を見ると、下へくと

其の灯が續いて居る。一たび折れる、二たび曲る。最後に長い長い廊の灯が、遙かに下に續いて居る。どうしても、誰かに、何かに會はねばならない氣がする。併し期待は破れた。我儕は人一人にも會はず、到頭三折の長い廻廊を仁王門におりて了うた。

宿に歸つて、薄暗い風呂場の風呂に入り、別館の奥まつた二階にくつろぐ。秋も暮方の宿、山氣膚に迫つて炬燵も欲しい位。此の一兩日腹工合の悪い鶴子の爲に、粥を注文したら、此の邊の風習として、常例の夜食にする茶粥を女中が持つて來た。

(徳富蘆花——死の蔭に)

鶴子

作者の養女、  
兄蘇峰の女  
徳富蘆花  
名は健次郎。  
小説家文章家

四 長谷寺詣

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も収まる頃、西行は長谷寺に着きけるが、問驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひも寄らて、

法華經  
法華經普門品  
第二十五卷、  
即ち觀音經

觀音堂に參り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉などの、空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀れに、また佛前の御燈明の瞬しつゝ、萬般のものの黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸みわたる思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ處といひ相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特に參りたるかひは有りけり、菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄みきりたる、此の清しさを何に比べん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、此の御堂の片隅になり、跏趺して、曉方になほ

一度誦經し參らせて、さて其の後香華をも供して罷らんと、西行やがて三拜して、御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木の、動きもせねば音も立てず、寂として坐し居たり。夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くなりぬ。右左に並びて立ちける御燈明は、一つ消え又一つ消えぬ。今は只いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに残れるのみ。此の寺の僧どもは寒氣に怯ちて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するもの無し。いふべき方もなく静かなれば、日比焼きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自ら匂を流すも、いと能く知らる。かゝるをりから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふる此の寺の者の、燈燭をつぎまゐらせんと來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へてや、頭には何やらん打被きた

れど、正しく僧の形したるが歩み寄るさまなり。心をとゞむとはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、此の御堂に打向ひて、一度は先づ拜みまつり、さて静々と上り來りぬ。御堂は狭からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互の程は隔たりたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方は能くも見得ねば、西行は唯我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有ることを知らざれば、何心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげにかしこまりて、數多たび合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の淺まならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくは無けれど、淨土の同行の人なるものを、呼掛けて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に

皆與實相云  
法華經第六卷  
にある語

思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべし、祈願の終つて後にこそと、心を控へて窺ふに、彼方は珠數を取出し、さやくとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜なる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮かなる響いと冴えて神々し。御經は心に誦すると覺しく、萬籟絶えたるに、珠數の音のみを唯緩やかに響かす。其の聲或は明かに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霞の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆與實相不相違背」といとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したる程の事は仕果てしにや、其の人珠數收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ。やをら、身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契を此の土に結ばんには、

今こそ言葉を懸くべけれど、

思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みておぼえずたまる我がなみだかな

と、歌の調は好かれ悪しかれ、西行俄かによみかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ、今一度と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけんと思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて。と再び言へば、後は言はず、君にておはせしよ、こはいかに。と、涙にふるふおろく、聲、言葉のあやもしどろもどろに、身を投げ伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、其の昔の我が妻にぞありける。(幸田露伴——二日物語)

幸田露伴  
名は成行。小説家。文學者。  
源爲義の長子。保元の變、後白河天皇の召に應じて白河殿を陥る。亂後、平治の亂に敗れて殺された。三十八歳。

五 船岡山

さるほどに、内裏よりすなはち義朝を召され、藏人右少辨資長朝臣

船岡

山城國愛宕郡  
紫野に在る

延景

秦野次郎の名

入道殿

源爲義

御さまをかへ

守殿

下野守源義朝

を以て仰せ下されけるは、汝の弟どもの未だ多くあるなるを、たとひ幼くとも、女子のほかは皆尋ねて失ふべし。となり。宿所に歸つて、秦野次郎を召してのたまひけるは、あまりに不便なれども、勅詔なれば力なし。母かめのとがいだきて、山林に逃隠れたらむはいかゞせむ。六條堀河の宿所にある當腹の四人をば、すかし出して、相構へて道の程わびしめずして、船岡にて失へ。とぞ聞えける。延景難儀の御使かなと心うく思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣くく、輿を昇かせて、かの宿所へぞ赴きける。母上は折節物詣の間なり。公達は皆おはしけり。兄をば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。此の人々は延景を見つけて、うれしげにこそありけれ。秦野の次郎、入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に比叡山にて御さまをかへさせ給ひて、守殿の御もとへ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北

雲林院

山城國愛宕郡  
船岡の東、紫野の西

大殿  
爲義を指す  
八郎御曹司  
源爲朝  
四郎左衛門  
より九郎  
頼賢・頼仲・爲宗・爲成・爲仲

山雲林院と申す處に、忍びてわたらせ給ひ候が、公達の御事おぼつかなくおぼしめし候間、見參に入れ奉らむ爲に、具し奉つて參らむとて、御迎にまゐつて候。と申せば、乙若出であひて、まことにさまかへておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、誰もく、皆こひしくこそ思ひはべれ。とて、我先にと輿に争ひ乗られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして、各輿どもに向ひつゝ、急げや急げ。と進みける。羊の歩み近づくを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに、船岡山へぞ行きたりける。峰より東なる所に輿かきすゑて、如何せましと思ふところに、七つになる天王走り出でて、父はいづくにましますぞ。と問ひたまへば、延景涙を流して、しばしは物をも申さざりしが、やゝあつて、今は何をか隠し參らすべき。大殿は守殿の御承りにて、きのふの曉斬られさせ給ひき。御舍弟たちも、八郎御曹司の外は、四郎左衛門



太平記  
源氏物語  
三平物語  
二平物語  
一平物語  
戦記

殿より九郎殿まで五人ながらよべ此の表に見え候山もとにて、斬られ奉り候ひぬ。君たちをも失ひ申すべきにて候。「相構へてすかし出し參らせて、わびしめ奉らぬやうに。」と仰せつけられ候間、入道殿の御使とは申し侍るなり。おぼしめすこと候はば、延景に仰せ置かせ給ひて、みな念佛候べし。」と申せば、四人の人々これを聞き、みな興より下り給ふ。

九つになる鶴若殿、下野殿へ使を遣はして、如何に我等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にも勝りなむずるものを。この由申さばや。」とのたまへば、十一になる龜若、まことに今一度人を遣はして、たしかに聞かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三なるが、あな、心うのものどもの言甲斐なさや。われらが家に生るるものは、幼けれども心はたけしと申すに、斯く不覺のことをのたまふものかな。世のことわりをわきまへ、身の行末をも思ひ給は

ば、七十になり給ふ父の病氣によつて出家遁世して、たのみて來り給ふをば斬り給ふべき事かは。これをだに斬るほどの不當人の、まして我々を助け給ふことあらじ。あはれ、果敢なき事し給ふ守殿かな。これは清盛が和議にてぞあるらむ。多くの弟を失ひはてて、たゞ一人になして後事のついでに亡さむとぞはからふらむを覺らず、只今わが身も失せ給はむこそ悲しけれ。二三年をも過し給はじ。幼かりしかども、乙若が船岡にてよくいひしものと、汝等も思ひ合せむずるぞとよ。さても下野殿討たれ給ひて後、忽ちに源氏の世絶えなむことこそ口惜しけれ。」とて三人の弟たちにも、な歎き給ひそ、父も討たれ給ひぬ、誰か助けおはしまさむ。兄たちも皆斬られ給ひぬ。情をかけ給ふべき守殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。されば命助かりたりとも、乞食流浪の身となりて、こゝかしこに迷ひ行かば、あれこそ爲義入道

内記平太  
名は政遠

の子どもよ。」と人々に指をさされむは、家のためにも恥辱なり。父戀しくば、唯西に向つて「南無阿彌陀佛」と唱へて西方極樂に往生し、父御前とひとつ蓮に生れあひ奉らむと思ふべし。」とおとなしやかにのたまへば、三人の公達各西に向つて手をあはせ禮拜しけるぞあはれなる。これを見て、五十餘人の兵もみな袖をぞぬらしける。此の公達に、各一人づゝ傳どもつきたりけり。内記平太は天王殿の傳、吉田次郎は龜若、佐野の源八は鶴若、原の後藤次は乙若殿の傳なり。さし寄つて髪結ひあげ、汗拭ひなどしけるが、年頃日頃宮仕へ、朝夕に撫てはだけ奉りて、只今をかぎりと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲をあげて叫ぶばかりにありけれども、幼き人を泣かせじとおさふる袖のひまよりも、あまる涙の色深く、包むけしきもあらはれて、思ひやるさへあはれなり。

乙若、延景に向つて、われこそ先にと思へども、あれらが幼心におち

怖れむも無慙なり。また云ふべきことも侍れば、あれらをさきに

立てばや。」とのたまひければ、秦野の次郎太刀を抜いて後へ廻りければ、傳ども、御目を塞がせたまへ。」と申して、みななきにけり。即ち三人の首まへにぞ落ちにける。



古版本の挿繪

乙若これを見給ひて少しも騒がず、いしう仕りつるものかな。われもさこそ斬られむずらめ。さて、あれはいかに。」とのたまへば、ほかるを持たせて参りたり。手づから此の首どもの血のつきたる

を押拭ひ、髪搔撫て、あはれ無慙の者どもや、かほどに果報少なく生

八幡

男山石清水八幡宮、山城國綴喜郡に在る

れけむ。只今死ぬる命より、母御前のきこしめし歎き給はむ其の  
ことをかねて思ふぞたとしへなき。「乙若は命を惜しみてや、後に  
斬られける。」と、人いはむずらむ。全く其の儀にてはなし。かやう  
の事をいはむにつけても、又わが斬られむを見むにつけても、泣止  
りたる幼き者の、また泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前の  
けさ八幡へ詣て給ふに、「我もまゐらむ。」と申せば、「みなまゐらむ。」とい  
へば、「具せば皆こそ具せめ、具せずば一人も具せじ、かた恨に。」とて、我  
等が寝たる間に詣てたまひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我  
等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見を  
も参らせず、只入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乗  
りつるばかりなり。さればこれを形見に奉れ。」とて、弟どもの額髪  
を切りつゝ、我が髪を具して、もし違ひもやせむずるとて、別々に包  
み分けて、各その名を書きつけて、秦野の次郎にたびにけり。

「又ことばにて申さむずることばよな、けさ御供に参りなば、遂には  
斬られ候とも、最後の有様をば互に見もし見え参らせ候はむずれ  
ども、なかく互に心苦しき方も侍らむ。御留守に別れ奉るも、一  
つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は、かりそめに立ちはな  
れ参らす事も侍らぬに、最後の時しも御見参に入らねば、さこそ  
御心にかゝり侍るらめなれども、かつは八幡の御はからひかとお  
ぼしめして、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契  
と申せども、來世は必ずひとつ蓮に参りあふやうに御念佛候べし。」  
とて、「いまはこれらが待遠なるらむ、とくく。」とて三人の死骸の中  
へわけ入つて西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前に  
ぞ落ちにける。四人の傳ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつ  
つ、天に仰ぎ地に伏して、をめき叫ぶもことわりなり。まことに涙  
と血と相和して流るゝを見る悲みなり。

内記平太は直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が肌<sup>はだ</sup>に當てて申しけるは、此の君を手馴れ奉りしより後は、一日片時も離れ参らすることなし。我が身の年の積る事をば思はず、早く人と成らせ給へかしと、あけくれ思ひてはぐみ参らせ、月日の如く仰ぎつるに、只今かゝる目を見る事の心うさよ。常は我が膝の上<sup>ひざの上</sup>にゐたまひて髭を撫てて、いつか人となりて、國をも庄<sup>ぢやう</sup>をも設けて知らせむざらむ。とのたまひしものを。うたゝねの寢覺にも、内記々々と呼ぶ御聲耳の底に留り、只今の御姿まほろしにかげろへば、さらに忘るべしともおぼえず。これより歸りて命生きたらば、千年萬年を経<sup>かぎ</sup>べきや。死出の山、三途の河をば、たれかは介錯申すべき。恐しくおぼしめさむにつけても、まづ我をこそ尋ねたまはめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らむ。といひもはてず、腰の刀を抜くまゝに、腹かき切つてぞ失せにける。

恪勤 長海便  
一人

恪勤の二人ありけるも、幼くおはしまししかども、情深くおはしつるものを、今はたれをか主とたのむべき。とて、刺違へて二人ながら死ににけり。「これら六人が志類なし」とぞ申しける。「同じく死する道なれども、合戦の庭に出でて、主君と共に討死し、腹を切るは常の習なれども、斯かる例は未だなし」とて、譽めぬ人こそなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず、あまりに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の側にぞ埋みける。  
(保元物語)

六 月二題

一 鹿ヶ谷法然院

晴き夜かき布を風は過ぎゆき

先は空しきかきしり照りぬ

月影はあけの海にありかきしり照りぬ

保元物語  
保元元年七月  
の合戦を主と  
し、その前後  
の事を叙した  
軍記  
鹿ヶ谷法然  
院  
京都市の東  
部、法然上人  
の遺迹

わづの歩は白銀の雪は落ちたる  
落葉のあとと共よさよとふ  
水の上にある青竹の影の  
水あひなるさとりがほの月  
古の板戸は上を照らす  
鳥さ木立の中より

スイハシ

水鏡の水はひとり  
つめたさ束の...を破りてひびき  
月 更闇きく 月影の裏へ行く  
銀沙壇の上はあり  
いんげん

(三木露風—象徴詩集)

三木露風  
現代の詩人  
最近露風と改  
題した

二月かりて共よ

月かりて共よあるゆき

砂を踏みながら帰つてゆく漁師の群

渚には光砕き 光砕け

波の音はえり だみ聲は語るか水

共よコーラスをつくる

あゝ かる一瞬

かる一瞬ありて海は位むきは幸福なる

福田正夫  
現代の詩人

七 紅葉の山

(福田正夫)

高倉院  
第八十代の天皇  
延喜天曆の帝  
醍醐天皇及び村上天皇

承安  
高倉天皇の年號

高倉の院御在位の御時、人の従ひつき奉ることは、恐らくは延喜天曆の帝と申すも、これにはいかで勝らせ給ふべき」とぞ人申しける。大方は賢王の名をあげ、仁徳の行を施させおはしますことも、君御成人の後、清濁を分たせ給ひての上の御事にてこそあるに、むげにこの君は、いまだ幼主の御時より、性を柔和に受けさせおはします。去んぬる承安のころほひは、御年十歳ばかりにもやならせおはしませ、榎楓の誠に色うつくしうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、ひねもすに觀覽あるに、なほ飽きたらせ給はず。然るをある夜野分はしたなう吹きて、紅葉みな吹きちらし、落葉すこぶる狼

縫殿の陣  
前に北の陣とあるに同じ

奉行の藏人

行幸とついでに

深き思ひを掛ける

林間煖酒云  
唐の白居易の詩句

藉たり。殿守のとものみやつこ、朝ぎよめすとて、これを悉く掃きすててけり。残れるえだ散れる木の葉をば掻集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒を煖めてたべける薪にこそしてけれ。奉行の藏人、行幸よりさきにと、いそぎ行きて見るに、あとかたなし。いかに」と問へば、「しかく」と答ふ。「あなあさまし、さしも君の執し思しめされつる紅葉を、かやうにしつることよ。知らず、汝等、禁獄流罪にも及び、わが身もいかなる逆鱗にか預らんずらん」と、思はじ事なう案じつゞけて居たりけるところに、主上いとゞしく夜のおとゞを出でさせもあへず、かしこへ行幸なりて、紅葉を觀覽あるに、なかりければ、「いかに」と御尋ありけり。藏人何と奏すべき旨もなし。ありのまゝに奏聞す。天機殊に御心よげにうち笑ませたまひて、林間煖酒、焼紅葉、といふ詩のころをば、さればそれらにはた

安元  
高倉天皇の年  
號

院  
後白河法皇

が教へけるぞや。やさしうも仕りたるものかな。とて、却つて叡感  
にあづかりし上は、あへて勅勘なかりけり。  
又安元のころほひ、御方違オシカタガハの行幸のありしに、さらでだに、鶏人曉を  
唱ふる聲、明玉の眠を驚かすほどにもなりしかば、いつも御寢覺が  
ちにて、つや／＼御寢もならざりけり。いはんやさゆる霜夜の烈  
しきには、延喜の聖代、國土の民どもがいかに寒かるらん。とて、夜の  
御殿にして、御衣を脱がせ給ひけることなど、までも思召し出でて、  
わが帝徳の至らぬ事をぞ御歎きありける。や、深更に及んで、程  
遠く人の叫ぶ聲しけり。供奉の人々は聞きもつけられず。主上  
は聞しめして、たゞ今叫ぶは何者ぞ。あれ見てまゐれ。と仰せけれ  
ば、上臥したる殿上人、上日のものに仰せて尋ねれば、或辻に怪しの  
女の童の、長持の蓋さげたるが泣くにてぞありける。「いかに」と問  
へば、主の女房の、院の御所に候はせ給ふが、この程やうやうにして

堯  
支那古代の聖  
主

建禮門院  
高倉院の中宮  
平徳子

仕立てられたりつる衣を持ちて參るほどに、唯今男の二三人まう  
て来て、うばひ取りてまかりぬるぞや。今は御裝束があらばこそ、  
御所にも候はせ給はめ。又はかく／＼しく立宿らせ給ふべき御方  
もましまさず。これを思ひつゞくるに泣くなり。とぞいひける。  
さてかの女童を具してまゐり、この由奏聞したりければ、主上聞し  
めして、あなむざん、何者のしわざにかあるらん。とて、龍顔より御涙  
を流させ給ふぞかたじけなき。「堯の世の民は堯の心のすなほな  
るを以て心とする故に、皆すなほなり。今の世の民は朕が心を以  
て心とする故に、かたましきものありて罪を犯す。これ朕が恥に  
あらずや。」とぞ仰せける。「さるにても取られつらん衣は何色ぞ。」と  
仰せければ、しか／＼の色と奏す。建禮門院その時は、いまだ中宮  
にて渡らせ給ふ時なり。その御方へ、さやうの色したる御衣や候。  
と、御尋ありければ、先のより遙かに色美しきがまゐりたるを、件の

平家物語  
平家一門の興  
亡を叙した軍  
記物語。普通  
十二卷。鎌倉  
時代の作。鎌倉  
者不詳

女の童にぞ賜はせける。未だ夜深し。又さる目にもや遭はん。とて、上日の者を數多つけて、主の女房の局まで送らせまし〜けるぞかたじけなき。さればあやしの賤の男賤の女に至るまで、只この君の千秋萬歳の實算をぞ祈りたてまつる。  
(平家物語)

八 碓氷より

碓氷  
上野・信濃兩  
國に互る

碓氷の絶頂より半道あまりの間は、薄と松との世界にて、紅葉は殆どこれなく、あるも已に散りたるあとにて、たゞ骨ばかりなる樹木叢をなし、其の間に枝ぶり面白く、染めたるやうに翠なる松の、此處に一本、彼處に一本、まばらに散在して風致を添へたると、枯薄の限りなく山に満ちて、山も亦白頭となりしかと思はるゝ程なるのみに御座候。此の薄の山を過ぎ候折、節、淺間の方俄かに搔曇り、麓は日影明かにさしながら、山は一點二點の時雨ばら〜と帽に落ち

申候。

時雨るゝや薄分けゆく山三里

など打吟じて急ぎ候程に、満山の時雨薄に落ち、恰も人の物言ふやうに御座候。空山聲なく、唯時雨の枯薄に落つる音と、時に木がらしの一陣樹間にわたりて、落葉さら〜と鳴る音と、遙かの谷底を姿は見せず流れ行く碓氷川の川音の、松風にまがひて山中に満つるとのみにこれあり候。一心水の如く澄んで、なんとなく氣森然と改まりたるやうに覺え候は、孟郊の所謂、山中人自ら正しきものにも候べきか。路は落葉多き處に入つて、時雨ます〜音高く相成候。

孟郊

支那唐代の詩人、字は東野

高尾

山城國葛野郡

遊蹤狭き小生の事として、紅葉と云へば、たかが京都高尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何かなし吾が立つ岨を中心として、碓氷の東面は盡く錦に候。左方の山谷を見れば、唯これ一面



の錦、右の山谷を見れば、又これ唯一面の錦、滿山の焰五色の焰、峯と云はず、谷と云はず、たゞ燃えに燃立つ美觀、殆ど壯觀、小生も覺えず「嗚呼」と叫び申候。其の黄色、淡黄色、褐色、黄褐色、其の他思ふべくして言ふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありとあらゆるちみなる錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黄紅の楓一樹、此方の谷の庭に、鮮血の如き淺紅の枝一枝、彼處の松の隣に夕燒の色よりも濃き深紅の兩三本、さながら一山を照す炬火の如く、萬段の錦の色を一時に呼びさまし來るを見たる時には、小生は、唯詩才のなきを恨み候。況や淺間時雨は、全山に水を洒ぎて去り、深碧の空は、明鏡の如く上より照らし、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を、惜氣もなく山に谷に漲り下らしめ候をや。此の峯に山人の棲みわぶる家一つ二つ有之、小生その家の前を過ぎ候時、主人に向ひて、「紅葉が好いね。」と云へば、「は、紅葉かね。」と申候。彼

白氏  
支那唐代の詩人。名は居易、字は樂天

等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、詩一首、歌一句、作ることなく、恐らくは唯一度の嘆美の辭をだに與ふることもなく、白氏の風流を知らず、紅葉を焚きて茶を沸し、朝夕の山の上り下りにも、あたたら錦を踏みにちり、斯くて年々紅葉を迎へ紅葉を送るにぞあらんずらん。吾が山を慕ふ如く、彼等は都を戀ふらんか。何れか得、何れか失、神ならて誰か知るべきなど思ひつゝ、行く行く道は谷に下りて、再び一驚を喫し候。顔照る焰に、山火事に取巻かれしには非ずやと、半秒時は驚き候。併し此の火は唯自ら燒くのみ候。戲言はさておき、小生の周圍に屏風を立廻らしたる如き山は、其の錦を洗ふ碓氷川より其の青天を戴く冠頭に到るまで、眞個に立錐の地もなきまで、一面に紅葉の衣をつけ、色といふ色木と云ふ木、堆又堆、叢又叢、色相争ひ彩相競ひ、眼を燒き魂を焦して爛然照渡り、仰ぎ見れば碧空蓋の如く上にあり、靜かに佇立して眺

堆又堆  
立錐の地  
紅葉が堆く  
しつううと  
しつううと

横川  
上野國碓氷郡  
白井町の驛名

むれば、恍惚として夢の如く美しく候。要するに、碓氷の全山固にこれ天公一篇自然錦綉の文に候へども、此のあたりは、少なくとも一篇中の精彩の其の一に居ること疑を容れず候。

横川より一里の所に、力餅を賣る茶店有之、同所に到れば、碓氷の右を通る舊道、中央を通る汽車道、左を通る新道、皆一所に落合ひ、碓氷三里紅葉の觀は此處に終り候。

(徳富蘆花 青蘆集)

九 秋窓雜記

△

かなしきものは秋なれども、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を酔はしむると月の人を清ましむるとは、自ら味を異にするものあり。喜樂の中に心の捕はるゝは、世俗の免るゝ能はざると

ころながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを擇ぶなり。

△

我が庵も亦秋の光景は乏しからざりけり。喉啼きやぶるばかりの鶉の聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこにもあらず、こゝにもあらず。窓を閉ちて書を披けば、一層高く聞ゆめり、鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けばおもしろさ讀書の類にあらず。

△

萩薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如く、此等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に、名も知らぬ花は愛づる心あれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さほどに嬉しと思ふ情なし。さはいへど、敢て在來の詩人を責むるに

はあらず、又自己の愛する所を言はんとにもあらず。唯我が秋に對する感の一として記すのみ。

△

鴉こそをかしきものなれ。我が山庵の窓近く下りたちて、我をながし目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば、脚を立て首を揚げて、飛去らんとする氣色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たゞ足を揃へて跳歩くのみ。浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとて、何の障にもなるまじけれど、其の塵芥ある處に集り、穢物ある處に群るの性あるを見ては、人間の往々之に類するもの多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を抛ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあくゝと鳴く聲は、我が局量を嘲る者の如し。げに皮肉家と云ふもの、文界のみにあざりけり。

△

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に、希望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一蟋蟀の爲に、我は眠の惜しまれて、物思なき心を宿しけり。

△

芭蕉の葉、秋風に動いて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、つと立止りて、そが中を覗ひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影、凜乎として俗世の物にあらず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず。うれしき事に思ひぬ。

(北村透谷——透谷集)

北村透谷  
明治時代の文  
學者

一〇 百蟲譜

啼く音の愛  
もし鳴かば蝶  
 蝶籠の苦を受  
 けん(西山宗  
 因)  
 莊周が夢  
莊周が夢に胡  
 蝶と化したこ  
 と。莊子にあ  
 る。

古今の序

花に鳴く聲水  
 にすむ蛙の聲  
 をきけばいき  
 としいけるも  
 のいづれか歌  
 をよまざりけ  
 る(古今集)  
 古池に云々  
古池や蛙とび  
 こむ水の音  
 (芭蕉)  
 やがて死ぬ  
やがて死ぬけ  
 しきは見えず  
 蟬の聲(芭蕉)

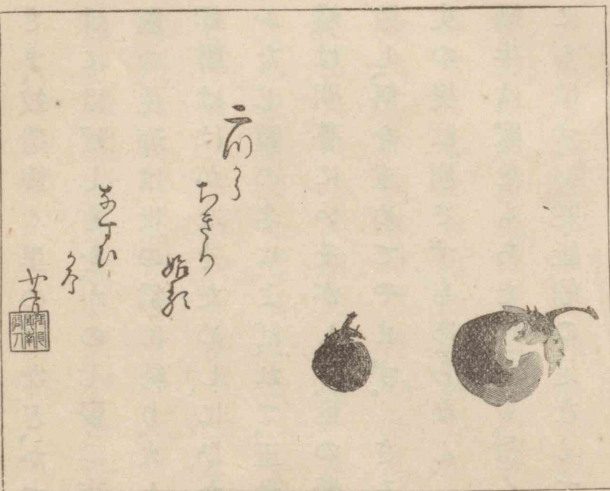
蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめてたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜に風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも誇りがたし。蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をさかず、この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草

貧の學者

晉の車胤貧し  
 くて油を得  
 ず、夏月數十  
 の螢火を練囊  
 に入れて書  
 讀んだといふ

筆蹟

二つからちぎ  
 り始るなすび  
 かな 也有



也 有 の 自 自 贊

にすだく。五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくつくほふしといふ蟬は、つくし戀しといふなり。筑紫の人の旅に死にて、この者になりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は長月

七賢

竹林の七賢、  
阮籍・嵇康・山  
濤・向秀・劉伶  
王戎・阮咸

蓼くふ蟲

蓼喰ふ蟲もす  
きずき(俚諺)

千丈の堤

千丈之堤以三  
蟻蟻之穴崩  
(韓非子)

螳螂

猶三蟻蟻之怒  
臂以當三車轆レ  
(莊子)

の頃力なく残りたるは、さびしきかたもあり。蚊張釣りたる家の  
さま、蚊遣焼く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は  
殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけん。  
蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこがすにか。  
蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。  
おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。  
蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚  
散し、餌を求めてやまず。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千  
丈の堤は崩さずもあらなん。  
蝸牛は家をもちたれども、行く先々を負ひあるくは、水蜘蛛の安き  
にも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多  
きは不用の事なり。  
螳螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の

原吉原

駿河國に在る

さざりざりす

秋風にほころ  
びぬらし藤は  
かまつりさ  
せてふきりざ  
りす鳴く  
(古今集)

藻にすむ蟲

あまのかる藻  
にすむむしの  
われからとね  
をこそ泣かめ  
じ世をばうら  
み  
(古歌)

横井也有

名は時般。俳  
人。名古屋藩  
士。天明三年  
歿。八十二歳

上にもこのたぐひはあるべし。  
蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕にのり  
て、富士を眺めゆく人にぞ似たる。  
促織、松蟲、轡蟲は、その音の似たるをもつて名によべり。松蟲のそ  
の木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむく  
つけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所  
に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。  
これ松蟲のたぐひなるべし。  
さきりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に住む蟲  
はわれからと、たゞ身の上をなげくらんを、藁蟲の「ちよよ」と呼ぶは、  
母をば慕はで、など父をのみ戀ふらんとあやし。(横井也有——鶉衣)

一一 秋のあはれ

一一 秋のあはれ

一 秋の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上、やがて五尺もこえつべし。「今歳はいかなれば、かくいつまでも丈のひくきことよ。など言ひてしを、夏の末つかた、極めて暑かりしに、只一日二日三日と數へずして、驚くばかりになりぬ。秋風少しそよ／＼とすれば、はしのかたよりあへなげに破れて、風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音なひ、これこそはあはれなれ。細かき雨はらく／＼と音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、ひとしきり颯と降りくるは、かの葉にばかりかゝるもいたまし。雨はいづれあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。更けゆくまゝに、燈火のかげなどうら淋しく、寝られぬ夜なれば、臥床に入らんも詮なしとて、小切入れたる疊紙とり出し、何とはなしに針をも取りぬ。いまだ幼くて、伯母なる人に縫物ならひつる頃

枉先、棲の形などむづかしう言はれ、いと恥かしうて、これ習ひ得ざらん程は、と、家に近き某の社に日參といふ事をなしける、おもへばそれも昔なりけり。教へし人は、昔の下になりて、習ひとりし身は大方物わすれしつ。かくたまさかに取出づるにも、指さきこはきやうにて、はかく／＼しうはえも縫ひがたきを、かの人あらば、如何ばかり言ふがひなく、淺ましと思ふらんなど、打返し其の昔の戀しうて、そゝろに袖もぬれそふこゝちす。遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打ちつくる騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいと心細さのやるかたなし。

(樋口一葉)

樋口一葉  
名は夏子。小説家。文章家。明治二十九年歿、二十五歳

二 雁がね

朝月夜の影空に残りて、見し夢のなごりもまだ現なきやうなるに、

下谷  
東京市下谷區

雨戸あけさせて打ちながむれば、さと吹く風、竹の葉の露を拂ひて、  
そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落來るやうに雁がねの聞えた  
る、孤つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり。思ふ人を遠き縣な  
どにやりて、明けくれ便りの待渡らるゝ頃、之を聞きたらば如何な  
る思やすらむとあはれなり。朝霧夕霧のまぎれに、聲のみもらし  
て過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音聞えて、月すむ田の面  
に落つらむ影思ひやるもあはれ深しや。旅寢の床、佗人の住家、い  
づくに聞きて、物思ひ添ふる種なるべし。一とせ下谷のほとり  
に假初の家居して、商人といふ名も恥かしき、唯いさゝかの物とり  
竝べて、朝夕のたづきとなしし頃、檐端の庇あれたれども、月さすた  
よりとなるにはあらで、向ひの家の二階のはづれを、纔かにもれ出  
づる影したはしく、大路に立ちて心細く打仰ぐに、秋風高く吹きて、  
空にはいさゝかの雲もなし。あはれ、かゝる夜よ、歌よむ友のたれ

三つ口

雁々三つ口、  
後の雁が先に  
なつたら弁と  
らしよ（東京  
の童謡）

清水濱臣

江戸の國學  
者。歌文に長  
ず。文政七年  
歿、四十九歳

かれ集ひて、靜かに浮世の外の物語など言ひかはしつるはと、俄か  
に其のわたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁たゞ一つ空に聲  
して、何處にかゆく。さびしとは世の常命つれなくさへ思はれぬ、  
擣衣の音に交りて聞えたる、如何ならむ。三つ口など囃して、小さ  
き子の大路を走れるは、さも淋しき物の、をかしう聞ゆるやと羨ま  
しくなむ。

（樋口一葉）

三 砧の音

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも  
又しきる。雁がねの砧をさそふにやあらん、砧の音の雁がねにか  
よふにやあらん。あな、あやし、あな、あやし。そもこの音のかなし  
きか、住む里のさびしきか、打つをりの憂きゆゑか。みなあらず、聞  
く人のこゝろのさびしきなり。

（清水濱臣）

一一 蘇州紀行

蘇州  
支那江蘇省の  
治城。一に姑  
蘇といふ。上  
海の西方にあ  
る

礎  
頭  
附

寒山寺  
蘇州西約一里  
剪燈新話  
支那の怪談本

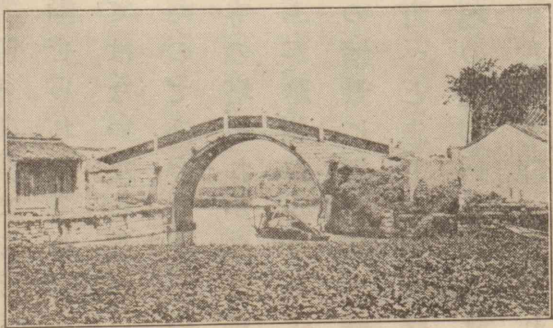
私の乗つた畫舫は、二三町水路を漕いでゆくと、こんもりとした木の下蔭をくぐり抜けた時分に、左方の運河へ曲つて行く。兩岸は雑草の生茂つた平地である。さきに盆石のやうに見えた山が、ここから遠望すると、後向の獅子がうづくまつたやうな形をして居る。右側の陸地では草原を切開いて、別荘を造るのか、墓地を造るのか、大工が盛に働いてゐる。崖の縁に碼頭を築いたり、立派な石の牌樓を積上げたりして居る。その少し先につやくとした眞黒な壁の家が見える。運河はそこから右手へ折曲るのであつた。私は日の暮れぬ中に、再び寒山寺の方へ行つて見て、さうしてあの剪燈新話の中にある美しい姉妹の住んで居た閶門外の方にまで船を廻はして見ようと思ふのであつた。曲るとすぐに左の方に方つて、遠く虎丘の塔が見えた。今朝吳門

楓橋  
寒山寺の北五  
六町の處にあ  
る

橋を通る時に、橋の下から遙かに望まれたのが、再び姿を現はして來たのである。塔が彼處にあるとすれば、私の今過ぎつゝある運河の位置も、大概推量することが出来る。吾々の船はやがて程なく楓橋の下へ出るであらう。清水の塔が京都の附物であるやうに、虎丘の塔は蘇州城の附物であるといへる。一昨日初めて汽車の窓から眺めて以來、昨日も今日も私は始終あの塔を眺めて歩いた。蘇州の西北の郊外に出れば、あの塔の見えない所は殆どない。

虎丘山上塔層々 夜靜分明見佛燈  
約伴燒香寺中去 自將釵釧施山僧

との詩を詠じた蘭英、蕙英の姉妹の家は、恰もこの運河の川つゞき





なる城外の西廓門のほとりにあつた筈であるから、虎丘山上塔層層といひ、夜靜分明見佛燈」といつたのは、蓋し實際の叙景であらう。姉妹が居た頃には夜な夜なあの塔に燈火が點ぜられて、それがきらきらと靜に瞬くのが遠くから望まれたのではないだらうか。それとも塔の傍にある靈巖寺の燈火が見えたのであらうか。一體蘇州にはこの塔の外にも、靈巖寺の塔、報恩寺の塔、それからまだ名の知れない塔が二つや三つはあつたと思ふが、蘇州にかぎらず支那には塔が多い。それがいかばかり附近の情景に趣を添へ變化を與へるか知れない。夕暮などに、とある町へと志して田舎路を歩いて來る時、或は汽車の窓によつて目的地の近づいたのを眺めてゐる時、遙な平原のあなたから、いち早くも我等を迎へてくれるのは塔である。

「あ、あそこに塔が見える。もうあそこが町なのだな。」

と思ふ。さういふ場合、塔はいひ知れぬ懐しさを旅人の胸に與へるのである。

岸にはぼつり／＼と家の數が少しづつ多くなつて來る。何處かで鶯の啼聲がのんびりと聞えて來る。私の行手には又してもフアンタスチックな曲線を描いた石造の鼓橋が、一つ二つと現はれて來るのであつた。最初の鼓橋の手前には一二艘の船が和かな午後の日を浴びて、居眠りもして居るやうにゆつたりと水に浮んで居る。一艘の船には洗濯をした着物が干してある。もう一艘の方は苦を懸けて、その上に一杯に白菜をならべてある。その橋を通り抜けると第二の鼓橋が七八町先の青空の中途に、虹の如く横はつて居るのが見える。橋の中央の弓なりに反つて居る弧の頂邊に、日向ぼつこでもして居るのか、一人の人影が、塔の如くぢつと動かずに佇んで居る。それは黒襦子の服を着た通りかゝりの

男が私の船の近づいて来るのを待構へつゝ、欄干にもたれて川の面を見下して居るのであつた。右岸の袂に、瓦が堆く積上げてあつて、傍に一人の女がうづくまりながら竹籠を編んで居る。左岸には一軒の露店があつて、何を賣つて居るのかと思つたら、棚の上にタオルだのタワシだのブラシだのが並んで居るらしい、この邊はちよいとした村になつて居るのであらう。兩岸には茶館だの、肉屋だの、鍛冶屋だのの店が、隙間もなく並んで居る。それらの家は一様に川の方を背中にして、後向になつて居るのだが、多くは運河の上に張出のヴェランダを拵へ、水と家との關係が如何にも親しみ深く造られてある。水は家を浸さうとし、家は水に戯れようとして居るやうな、どうかすると壁造の家が運河の中に直に浮いて居るやうな感じをさへも與へるのである。茶館や肉屋には晝間だといふのに五六人の村人らしいのが入込んで居る。

鍛冶屋の店からは、鋸の音が、カチン、カチンと靜に優長に響いて居る。村はづれの右角に竹屋があつて、竹筏が幾艘も店の前に繋いである。われ／＼の船がそこへかゝると、一人の男が急いで店から駆けて來て、堀割の通路を塞いでゐる筏を、力一杯に岸の方へ寄せつけて居た。

竹屋の角から晝舫は右の運河へ曲る。

「もうぢきに寒山寺でございます。」

手持無沙汰で居た男が、忘れて居た案内の役目をふと思出したやうにいつた。

と見ると、七つか八つになる女の兒が二人、右舷の石崖の上に佇みながら、青磁の瓶を水に浮べて、それがどんよりと漂うて居るのを餘念もなく見詰めて居る。向ふからは一艘の船がゆるやかに漕いで來た。船の上で黒い物がもく／＼と動いて居るらしいので

何かと思つたら鵜飼船であつた。兩側の船舷に五六羽づゝ鵜が止つて、翼と首とを長く伸しつゝ、われゝの畫舫とすれちがひに悠々と通りすぎて行く。左の岸には横腹を眞赤に塗つて、頭の方に白い眼をつけた、鯛の形をした船が泊つて居る。川筋の正面にはまた新なる鼓橋が、優しい姿をしてわれゝを迎へた。橋の頂上には、そこにも同じやうに人影が佇んで居る。今度の男は片手に鳥籠を持つて、眞赤な服を纏うた子供を従へて居るのであつた。橋をくゞれば、右側の桑畑の繁みの中から、寒山寺の藁がちらゝ窺はれた。寺を間に挟んで前後に重り合つて居る二個の鼓橋の、先の方が昨日見覺のある楓橋に違ひなかつた。われゝをここまで運んで來た堀割の水は、楓橋の彼方で丁字形に交叉してゐる運河の水と一つになつて、閘門外の市街の方へ押流されて行くのであらう。

さつきから河岸傳ひにわれゝの畫舫を曳いて居た船頭は、やがて綱を手繰りよせつゝ、楓橋の上に馳登つて、今その下に來かかつた女房の手にすばやく綱を渡してやつた。

寒山寺の對岸には、支那には珍しい小松の林が連つて居る。櫃の方を振り返ると、夕日もう靈巖山の塔のほとりに沈みかけてゐた。

姑蘇臺上月圓々 姑蘇臺下水潺々

月落西邊有時出 水流東去幾時還

門泊東吳萬里船 烏啼月落水如烟

寒山寺裏鐘聲早 漁火江楓惱客眠

谷崎潤一郎  
小説家

(谷崎潤一郎——潤一郎傑作集)

一三 徒然草抄

公世の二位  
從二位藤原公  
世

一 堀池の僧正

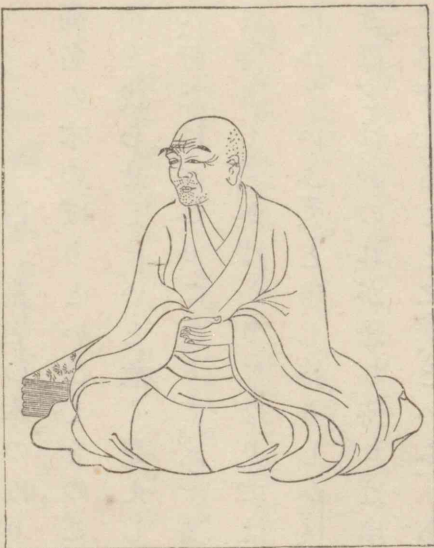
公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大きな榎の木ありければ、人、榎の木の僧正とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を伐られにけり。その根のありければ、切杖の僧正といひけり。いよく腹立ちて、切杖を堀棄てたりければ、堀池の僧正とぞいひける。(第四十五段)

二 入り立たぬ様

何事も入りたぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎より出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよし（心得たるよし）のさしいらへはすれ。されば世にはづかしきかたもあれど、みづから（みづから）いみじと思へるけしき（けしき）かたくななり。よくわきまへたる道にはかならず口おもく、問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ。  
(第七十九段)

三 二つの矢

ある人弓射る事をならふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の



吉田兼好

いはく、初心の人二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、はじめの矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢にさだむべしとおもへ。といふ。わづかに二つの矢、師のまへにて一つをおろかにせんとおもは

んや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらんことをおもひ、朝には夕あらんこと

をおもひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞ只今の一念において、ただちにすることの甚だ難き。(第九十二段)

四 高名の木のぼり

高名の木のぼりといひしをのこ、人をおきてて高き木にのぼせて、梢を伐らせしに、いと危く見えし程はいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、あやまちすな、心しておりよ。」と言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかにかくいふぞ。」と申し侍りしかば、そのことに候。目くるめき、枝危きほどは、おのれが恐れ侍れば申さず。過はやすきところになりて必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下藤なれども、聖人のいましめにかなへり。(第百九段)

五 鬼神は邪なし

龜山殿建てられんとて、地をひかれけるに、大きなるくちなは、數も知らず、凝集りたる塚ありけり。「この所の神なり。」といひて、事の由を申しければ、いかゞ有るべき。」と勅問ありけるに、ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく堀棄てられがたし。」と、みな申されけるに、このおとゝ一人、王土にをらん蟲、皇居を建てられんに何の祟をかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからず。たゞ皆堀棄つべし。」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大堰川に流してけり。更に祟なかりけり。(第二百七段)

一四 いさよふ月

むかし、壁の中より求めいでたりけむふみの名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛の葉かへすゝも書置くあとたしかなれども、かひなきもの

ふみの名  
孝經のこと  
みづぐきの岡  
水藪の岡の葛葉を吹きかへしおも知る兒等が見えぬころかも(古歌)

このおとゝ  
藤原實基  
大堰川  
丹波保津川の  
下流、嵐山の  
附近を流れる  
時の稱

神樂の詞  
「あはれあな  
おもしろあ  
なたのしあ  
なさやけお  
け。」  
世を治め云

紀貫之の古今  
集の序に見ゆ  
二たび勅を  
藤原定家新古  
今集と新勅撰  
集とを撰び  
その子爲家も  
亦續後撰集と  
續古今集とを  
撰んだ  
三人のをの  
こ子  
俊成一定家  
爲家 爲氏  
爲敬  
爲願 阿佛  
爲相 尼の  
爲守 子  
細川  
播磨國美養郡  
細川庄

は親のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬまつりごとにも  
漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひ  
とつなりけりと思ひ知りながら、またさてしもあらで、なほこのう  
れへこそやる方なく悲しけれ。さらに思ひつゞくれば、やまと歌  
の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もや  
あらむ。日本の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂  
の詞をはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりける  
とぞ、この道のひじりたちは、記し置かれたりける。さて又集を  
えらぶ人は、ためし多かれど、二たび勅を受けて、世々にきこえあげ  
たるは、たぐひなほあり難くやありけむ。そのあとにしもたづさ  
はりて、三たりののをのこ子ども、ちの歌のふる反古どもを、いか  
なるとにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたすけよ、子  
をはぐ、め、後の世をとへ。とて、深き契をむすび置かれし細川のな

子を思ふ

人の親の心は  
闇にあらねど  
も子を思ふ道  
に恋ひぬるか  
な(平兼輔)

み冬たつは  
じめ

建治三年十月  
人やりならぬ  
人やりの道な  
らなくに大方  
はいきうしと  
いひていざ歸  
りなむ(古今  
集、源實)

がれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あと訪ふ法のともし火も、  
道をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共にきえをあらそふ年  
月を経て、あやふく心ほそきものから、何としてつれなく今日まで  
はながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、  
子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく、道をかへりみるうらみは、やら  
む方なく、さてもなほあづまの龜の鑑に映さば、曇らぬ影もやあら  
はるゝと、せめて思ひ餘りてよろづのはかりを忘れ、身をえうな  
き物になしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなむ  
とぞ思ひなりぬる。ころはみ冬立つはじめのさだめなき空なれ  
ば、ふりみふらずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に  
みだれ散りつゝ、事にふれて心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道  
なれば、いき憂しとともとまるべきにもあらで、なにとなくいそ  
ぎ立ちぬ。目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭もまが

侍従  
爲相。冷泉家の祖。當時十五歳  
大夫  
爲守。後出家して鴨月といふ。當時十三歳

きも、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖の雫も、なくさめかねたる中にも、侍従・大夫などの、あながちにうち屈じたるさま、いと心苦しければ、さまざま、いひこしらへぬ。代々に書置かれる歌の草紙どもの奥書などして、あだならぬ限りを選びしたゝめて、侍従のかたへ送るとして書きそへたるうた、

和歌の浦にかき留めたる藻鹽草

あなかしこよこ浪かくな濱千鳥

一方ならぬあとをおもはば

これを見て、侍従のかへりごといと疾くあり。

ついによも仇にはならじ藻鹽草

かたみをみよの跡にのこさば

まよはまし教へざりせば濱千鳥

ひとかたならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるにも昔の人に聞かせ奉りたくて、またうちしをれぬ。大夫の、傍去らず馴來つるを、振捨てられなむ名残あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

はるくくとゆくさき遠く慕はれて

いかにそなたのそらを眺めむ

と書きつけたるものよりことにあはれにて、同じ紙に書きそへつ。

つくくくと空な眺めそこひしくば

道とほくともはやかへりこむ

とぞ慰むる。

(阿佛尼——十六夜日記)

一五 野村望東尼

阿佛尼  
藤原爲家の後妻、歌人。北條白宗の頃の人

野村望東尼は筑前福岡の藩士浦野勝之の娘で、俗名を「もと」と云ひました。望東尼とは出家した後の名です。

もと女は天性歌の道に堪能で、若い時分から、秀逸の作を出しては世間を驚かしました。嘗に文才に秀でて居たばかりでなく、性質も極めて温順で、藩中での評判娘であつたのでございます。二十四歳の時、同藩の士野村貞貫に嫁しましたが、才學並び具はつてゐる上に、温順に夫に事へましたから、一家は常に春風胎蕩和氣堂に満つといふ有様でした。夫貞貫は不圖した事情のために、俄かに仕官を辭しました。そこで共に城下を引拂つて、邊鄙な平尾村に草庵をしつらひ、其處へ移り住むことになりました。今は松風蘿月の生活で、別に爲すべき事とは無く、もと女は又素より好む所であるから、只管敷島の道を樂しみ、折さへあれば書物に眼を曝したので、大層學問も進歩しました。ところが、不幸にして夫は病に

仕官を辭す

時にもと女四十一歳

尼になり

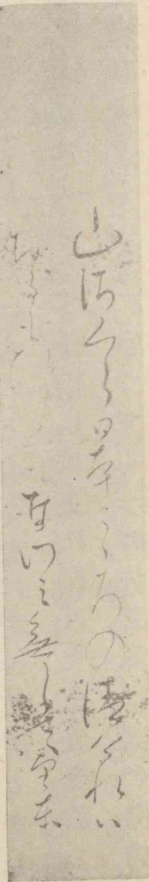
時に五十四歳

筆蹟

山さくら日本  
こゝろの清け  
れはちるもひ  
らくもなつみ  
無して

望東

冒され、段々重態に陥つて、もと女が身を粉にしての看護も其の甲斐なく、たうとう不歸の客となつてしまひました。氣丈のもと女も落膽一通りて無く、其の後はひとへに夫の冥福を祈らうと決心して尼になり、本名の「もと」を取つて、望東尼と申しました。時は恰



望東尼  
の筆蹟

も徳川幕府の末でございますから、國內の騷擾は一通りでありません。先に幕府が外國と修好條約を締結した爲に國論一時に沸騰し、或は鎖港攘夷を唱へる者、或は此の時に乘じて、幕府を倒し王政に復古しようとして、尊王討幕を説く者、或は從前の如くに幕府を助けて、内治外交の處置をしようといふ所謂佐幕黨もあつて、志士の國難に殉ずる者も少なく無かつたのでございます。



高杉晋作  
山口藩士。號  
は東行。勤王  
家。慶應三年  
歿、二十九歳

高杉晋作  
山口藩士。號  
は東行。勤王  
家。慶應三年  
歿、二十九歳

望東尼は前申す通り、若い時から和歌に堪能であつたので、自然國學をも研究して、我が國體に就いては深く知る所がありました。隨つて至尊を措いて幕府が政柄をとり、擅に天下に號令するのを、常々如何にも残念なことだと思つて居りました。其の矢先に此の度の騷擾があつたのでございませうから、女ながらも勤王の志を固め、長州の高杉晋作、其の他の尊王の志士とも交り、折もあつたら己も微力を致したいものと心竊かに考へて居りました。燈火も消えようとする前には、更に閃々たる光を放ちます。幕府の倒れようとするに當つても、一時佐幕黨は其の勢力を加へて來ました。殊に徳川の権力で、勤王の志士を壓迫しますから、正義の士は何れも切齒扼腕、血涙に咽びながらも、身を隠すより外はありません。所が望東尼の庵室は人里離れた山中で、志士の隠場所には最も適當なので、多くの志士は危難の身に迫る毎に此所へ逃込

七人の公卿  
三條實美・三  
條西季知・東  
久世通禧・錦  
小路頼徳・四  
條隆謨・壬生  
基修・澤宣嘉

んで來ます。望東尼はそれを手厚く待遇して、力の及ぶかぎり衣服食物なども給して居りました。丁度其の頃、討幕を唱へて而も事志と違ひ、難を長州に避けて居つた三條實美公始め七人の公卿方は、更に筑前藩へお預けとなつて、太宰府に居られました。尼は此の事を聞くと、わざ／＼出向いて此の公卿方を訪ねて、懇ろに慰めました。三條公は尼の誠心を嘉せられて、

すめらぎのたゞしき道をふむ人は

千とせのさかをやすくこゆらん

と云ふ一首を詠じて與へられました。

後この七卿に謁見した事が幕府の知る所となると、其の尼油斷ならず、直ちに召捕れ。といふことになり、なほ色々の嫌疑をも受けて、あはれ六十歳の老尼は、獄屋の人となつたのでございませう。其の

姫島  
博多灣頭にあ  
る

時の歌に、  
 浮雲のかかるもよしやものゝふの  
 やまとごゝろの數に入りなば  
 といふのがあります。これは慶應元年の夏のこととごいます。尋いで姫島といふ島へ流されましたが、此處でも極めて狭い牢屋に入れられ、天吹く風巖打つ波の音を聞くにつけても、勤王の志士を思ひ、皇運の開けることばかりを念じて、中宵夢を成さぬ事も幾度か知れない程でした。「姫島日記」は其の時認められたもので、やさしい水莖の間に、血あり涙ある文字を残したものであります。斯くする中に、老尼の健康は次第に衰へて來ました。心の惱と體の疲とが、老の身を倒さうとかゝつたのであります。折よく此の事が長州方に漏聞えました。「こは猶豫ならず」と、高杉晋作等は一  
 夜風雨に乗じて、姫島へと押渡り、獄を破つて尼を救ひ出し、一旦馬

三田尻  
今、山口縣防  
府町の中

關へ連歸り、間もなく更に周防の三田尻へ伴なつて靜養させました。何分にも老體の上、非常に疲勞して居りますので、病氣は次第に重るばかり。藩主毛利氏も殊の外目をかけられて、或は御見舞の品を下され、或は典醫に脈を取らせなどして、種々に手をつくされましたが、命數の盡きる時は如何とも致方の無いもので、卒に養生も叶はないで、慶應三年十一月の十三日に、英魂空しく此の土を去つてしまひました。享年は六十有二。  
 (佐々政一)

佐々政一  
文學博士、國  
文學者。大正  
六年歿、四十  
六歳

一六 詩二篇

一 わが髪

わが髪はまたもほつるゝ  
 朝夕に  
 なほざりならず櫛とれど

あゝ誰か髪うつくしく  
一寸ぢも

亂さぬことを忘るべき

ほつるゝは髪のがなり

やがてまた

やむにやまれぬわが心

二 雪のたそがれ

落葉した木はYの字を

墨くろくゝと空に書き

思ひきつたる明星は

與謝野晶子

與謝野鐵幹氏  
の妻。歌人、  
文章家

延喜

醍醐天皇の年  
號

黄金の句點を一つ切る

薄く削つた白金の

神経質の粉雪よ

おこりをふるふ電線に

ちくくさはる粉雪よ

(與謝野晶子——愛、理性及び勇氣)

一七 菅 公

延喜元年二月一日、公、京師を發して太宰府に赴く。従ふ者は小男と小女と、味酒安行と、名づくる一門生とのみ。その子の官にある者處を異にして盡く流竄せられ、その他門下郎等、一人も公に伴なへる者なし。夫人、女子亦隨行を許されず。ただ勅使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼、昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲惨。住慣れし紅梅殿を出づる時、平

生愛せる庭前の梅花の、未だ春を迎へざるを見て、悽惻の情に勝へず、一首を詠じて曰く、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春をわするな

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり。

君がすむ宿のこずゑをゆくも

隠るゝまでにかへり見しはや

勅使藤原眞興は攝津に於て公に別れ、右衛門少尉善友、益友、衛士二

人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は

純然たる囚人にして、任中俸給を賜はることなかりしなり。

行きく、河内の國土師の里に到り、道明寺に宿る。道明寺は菅

家歴代の寺にして、當時菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍一たび別るれば、

いづれの時を期してか相會するを得ん。公惜別の情を唱うて

道明寺  
河内國北河内  
郡道明寺村

曰く、

啼けばこそ別れをいそげ鶏が音の

馬の軋りのきこえぬ里のあかつきもがな

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長公を見て、其の轉變の甚だし

きに驚く。公乃ち一聯を作り、自ら慰めて曰く、

驛長莫驚時變改 一榮一落是春秋

山河遼たり、行くに随つて隔り、風景黯然として、路に在つて移る。

長亭短驛幾度か送迎し、二月三月空しく過去りて、公は遂に太宰府

の配處に到る。

太宰府の配處は、公によりて絶好の詩境なりき。外に名利の競争

なく、内に危殆の憂悶なし。今やしづかに往時を懷慕し、現境を思

料し、咏嘆によりて其の哀情を遣るべきなり。天は公に授くるに

詩人の天分を以てし、而してまづ公に與ふるに政治家の境遇を以

山河云々  
菅家後草に在  
る句

危殆

二句

驛

馬

軋

鳴

てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸、外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども悲しいかな、斯くの如くなるにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。而も公は死に至るまで、此の天分の地に居るを悲しみ、静かに春秋の榮落を觀じて、何時かは昔日の榮華に歸るあらんことを望みたりき。此の憂愁と希望との現はるゝ所に、公の天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫も之を知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷無情一に何ぞ是に

太宰府天満宮



南海の詩  
公の讃岐守であつた時の詩

紀長谷雄  
文章博士、菅公に學ぶ、延喜十二年薨、六十八歳

至るや。太宰府に於ける公の詩は甚だ多からず。然れども一言一句性靈の聲ならざるはなし。文字時に洗煉ならず、思藻必ずしも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に横溢して、公の面目躍如たるを覺ゆ。これを南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、情更に痛切、感極まる所、往々人をして卒讀に堪へざらしむ。詩も此に至りては、徒らに技巧のみに非ざるなり。薨ずる時、集めて一卷となし、封緘して紀長谷雄に送る。長谷雄之を見、天を仰いで嘆息せりといふ。今のいはゆる「菅家後草」と稱するものはこれなり。今左に其の二三を摘録せん。

自詠

離家、二三月 落涙百千行  
萬事皆如夢 時々仰彼蒼  
これ後草卷頭の詩なり。公が昨今の轉變、眞に一夢にくらぶべし。

都府樓

都府樓（觀音寺）  
五色（觀音寺）  
寺只（鐘聲）  
（菅家後章）

其の筑紫に在るや、門を杜ぢて一步も外に出でず。都府樓は近しと雖も、纔かに瓦色を望み、觀音寺は遠からずと雖も、ただ鐘聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざるも、公自ら檢束して遙かに謹慎の意を致せり。

秋氣漸く催し、旅雁渡ること頻りなり。憐むべし、公はなほ何時かは京都に還る日あるべきを思量して、一縷の望を繋ぎしなり。旅雁を見て遙かに情を託す、何ぞそれ悽愴たる。

聞旅雁

我爲遷客汝來賓

共是蕭々旅漂身

欽枕思量歸去日

我知何歲汝明春

重陽の佳節は來れり。しかも公は唯ひとり敗屋の下に愁臥するのみ。遙かに去年今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へんや。有名なる九月十日の絶唱は、實に此の感慨を述べたるなり。

去年  
醍醐天皇昌泰三年

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

棒持毎日拜餘香

罪なくして此の流竄に遇へりと雖も、公は一度も君主の不明を恨み、奸臣の讒構を愠りしことあらず。偏に一身の不遇を嘆じて、天命の否塞を悲しみたるのみなりき。唯その罪なくして汚名を干歳に遺すは、公の忍ぶあたはざる所なり。故に公の詩や、もすれば此の事に及ぶ。されど斯くの如き境遇にありて、猶君恩を感謝す。亦以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべきなり。延喜三年二月二十五日、公は斯くの如き慘澹たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出てしより二箇年餘。其の墓所を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行はじめて神殿を安樂寺に建て、天満大自在天神と稱せりといふ。斯くの如く太宰府の左遷は、實に公をして其の詩人の天分を全うせしめたるのみなり。

安樂寺  
太宰府に在る

高山林次郎  
文學博士。文  
學者。明治三  
十五年歿、三  
十四歳

らず、其の人物の上にも、一層の品位を加へしめたりといふべし。

(高山林次郎——樗牛全集)

一八 忘れ難き日

嗚呼忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風  
薫ずる日、友に擁せられて家を辭し故國に別れしは、恰も今日の此  
の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上艇中、相隔たりては  
面も定かならず、姿も終には見分かれぬ。健全なれ。  
再び早く相見んと。別の言葉は猶耳に響き、最後の握手今猶掌  
に感ぜられつゝも、見渡せば、白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の  
家屋、故國の山河、已に霞の中に入りき。嗚呼、かくて相別れたる  
我が友、今何處にかある。彼は其の夜、西の方足柄を過ぎて、清見灣  
のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣り

我が友  
高山樗牛  
足柄  
神奈川縣足柄  
上郡の山  
清見瀉  
靜岡縣庵原郡  
興津町の南方  
海灣

しなり。月は去り日は逝きて、五年後の今日この日、我は來りて此  
の海樓にあれど、彼は既に世を謝して、復相見んによしなく、我をし  
て孤影蕭然欄に憑りて、無限の感に沈ましむ。

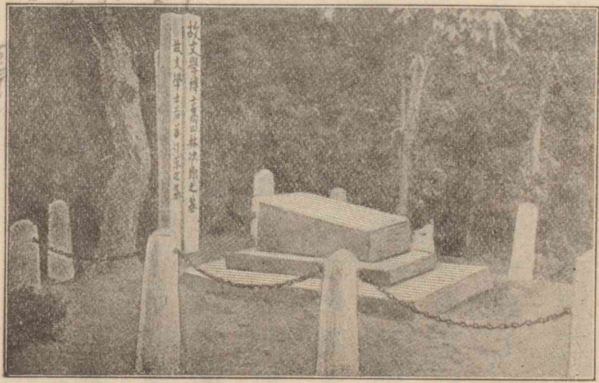
三月、君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰  
えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて、離別の悶を遣りたりき。  
其の夜、月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄  
に倚りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。  
人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、  
獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見淺せば有渡の  
山影、かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼  
が夢遊の山川、總べて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。  
此の海、此の地、これ彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、こ  
れ彼が鎖魂の種たりしこと幾たびぞ。山海舊の如く、風光昔の儘

有渡の山  
久能山の別稱  
袖師の松原  
三保の松原の  
一部

彼が墓  
樗牛の墓は、  
静岡縣安倍郡  
不二見村龍華  
寺にある

修  
墓  
土

にして、彼が友は已に歸り來つれど彼と其の姿とは、今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散掛る寒水石の碑を撫で、今夜五年前の今日の別離を忍んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。されど徒らに憂ふるを已めよ、人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらず。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて、神相接せしむ。友此處にあり、悠久の夜亦此處にあり。彼が遺文、餘薰新にして、我が思慕、日夜彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして、夜靜かなり。



姉崎嘲風

名は正治。文學博士。東京帝國大學教授

麻の中の云々  
荀子勸學篇にある語

形は見えねど、彼は我に語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。歲月水と流れ去つて、五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては、生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。  
(姉崎嘲風——停雲集)

一九 朋友選ぶべし

人は善き友にあはむ事をこひねがふべきなり。「麻の中の蓬は、たぬめざるにおのづからなほし」といふ喩あり。蓬は枝ざし直からぬ



顏氏家訓  
隋代の人顏之推の撰

或文  
韓非子を指す

九條殿  
藤原師輔

董猶云々  
孔子家語に在る語

草なり。されども麻におひ交りぬれば、ゆがみ行くべき道のなきまゝに、心ならずうるはしく生ひのぼるなり。心の悪しき人なれども、うるはしくうちある人の中に交りぬれば、さすがかれこれを憚る程に、自ら正しくなるなり。これによりて、善き友にあはむことを經に説かれ文にもすゝめたり。顏氏が家訓には、  
與善人居、如入芝蘭之室、久而自芳也。與惡人居、如入鮑魚之肆、久而自臭也。

と云へり。また或文には、人の心は水の入物にしたがふが如し。入物細ければ即ち細くなり、入物圓ければ即ち圓くなる。こゝろは朋友にならふ、何ぞ擇ばざるべけむと書けり。又九條殿の遺誠には、高聲惡狂の人に伴なふことなかれと教へ給へり。かゝれば果敢なくうちかたらはむ友なりとも、よく其の人を擇ぶべし。薰蕕器を異にすべし」となり。ゆめく心あしからむ人に伴なふべ

芝澗に住みし四人  
漢の商山の四皓、東園公、夏黃公、角里先生、綺里季竹林に籠りし七賢  
五五頁の註にある  
子猷は云々  
王子猷は東晉の安道は其の友戴逵の字、晉書にある  
劉惔は云々  
劉惔は東晉の人、玄度は其の友許惔の字、晉書にある  
鄒枚  
鄒陽、枚乘、とも梁の孝王の臣  
兎園  
魯王の園の名  
孔子の仲尼  
孟子の母  
伯牙、鍾子期共に周代の人

からず。花の下に春ばかりを契り、月の前に一夜を限る友までも、情あるたぐひは、忘れがたく思ひ出でらるゝものなり。すべて友をかたらふには、隔つる心なきを徳とす。芝澗に住みし四人の翁、竹林に籠りし七賢の類、さこそおもはしき友なりけむ。子猷は、雪の夜、月にあくがれて、遙かに剡縣の安道を尋ね、劉惔は清風朗月に、玄度のなきことを恨みけり。まことに友のなからむには、如何なる興宴も物うくおぼえぬべし。さればこそ梁の孝王は、鄒枚と聞えし二人の臣さりにしかば、兎園の遊をも停め給ひ、魯の仲尼は、子路といひし思はしき弟子におくれて後は、人のすゝめけるし、びしほをも捨て給ひけり。孟母が子を思ふ故に、居を三度までかへけるも、友を選ぶ意なり。  
伯牙、鍾子期といふは琴の友なり。鍾子期先だちて失せにければ、今は誰にか琴の音を聞知られむとて、伯牙その絃を外して弾かさ

元稹と樂天  
共に中唐の詩人

龍門  
一名河津。支那山西省。黃河の上流。

後三條院  
第七十一代の天皇

實政  
藤原氏。後三條天皇が東宮の時大江山房と共に入られた。

十訓抄  
歌訓に資すべき事を十項に分けて書かれた。その集められたのは初期の作家であるが不詳

りけり。元稹と樂天とは詩の友にてありしが、元稹はかなくなりしかば、樂天その作りたりし詩ども三十卷集めて、唐の大教院の經藏にぞ籠めおさける。

遺文三十軸 軸々金玉聲 龍門原上土

埋骨不埋名

とは、これを書きしなり。

後三條院東宮にておはしましける時、學士實政朝臣任國に赴きけるに、名殘惜しませ給ひて、

忘れずばおなじそらとも月を見よ

ほどは雲ゐに廻りあふまで

君なれども臣なれども、互に志深く隔つる思なきは、朋友にひとしと云へり。

(十訓抄)

二〇 無題錄

一

世に人の非を擧げて快とするものあり。これを聞いて喜ぶものあり、皆罪惡なり。その甚しきは國法これを禁ぜり。人の私事非行は隱蔽せざるべからず。これを摘發して快とするは、殘忍暴戾の野獸性なり。人は既に動物なり、野獸と共通の性なきに非ず。かくの如きはその一なり。然れども人の野獸と遠きは、德義の性にある。私事非行を發するが如きは、これに反す。慎まざるべからず。人の美は擧げて稱すべく、人の惡は熟知するも黙して語るべからず。その意見の相違するや、或はこれに對して情の激するや、心猿の走るにまかせて他の私事非行を發するに至ること、往々士君子淑女の間にもこれを見る。又嘆ずべきの至なりとす。

二

山川の秀麗なるや、その美天然にあり。然れどもこれに歴史の加

二〇 無題錄

はるなくば、眞の名勝といふべからず。わが國の京都のごときは、丘山の間に介せる一小平野なり。これに點ずるに古寺を以てす。而して我が國無比の名勝となせり。若しこれより一千餘年の歴史を奪ひ去らば、平凡の風景にして特に稱賞の値なし。敗殘の金陵も亦一千餘年の歴史によりて、猶見るに足るものあり。歴史とは人事を記叙せるものなり。人にしてこれを閑却し眺望せば、鳥獸の遊飛と何ぞ異らん。故にわれ常に歐亞の兩洲に遊ぶを喜び、南北米洲に遊ぶを欲せざるなり。

三

古に曰く、それ鵠は日に浴せずして白し。烏は日に黔せずして黒し。と。實に然り。その性に從ひ各色を異にするなり。鵠を黔するも黒からず、烏を浴せしむるも白からず。故に曰ふ、倫理道德の如きは、その國民の固有せる歴史によりて定められたるものにし

て、他の模倣をゆるすべからざるなり。と。

我が邦の愚者徒に歐米崇拜に耽溺し、歐米の國民性及び歴史に適合せる倫理道德をとり來りて、直に我が邦に用ひんとす。これ鵠を黔し烏を浴せしめ、その黑白を顛倒せしめんと欲するの類なり。

四

人は虎を見て恐れ、鼠を見て、これに狎る。然れども虎の害を被る人は少く、鼠の害を被る人は多し。虎の害たるや僅かに一人を食ふにあり。鼠の害たるや財を耗し、疫を傳へ、比隣環境その害を蒙らざるなし。而して人のこれを恐れざるは、鼠の性、柔なるを以てなり。

その恐るべきを恐れず、その懼るべからざるを懼るゝは人の情なり。人の情の理に遠きこと概ねかくの如し。

五

大谷光瑞  
前東本願寺法  
主

新古今集

新古今和歌集  
の略。後鳥羽  
上皇の時の  
撰、二十卷

千載集

後鳥羽天皇の  
時の撰、二十  
卷

三代集

古今集、後撰  
集、拾遺集

智者を欺くに道を以てすれば難からず。愚者は諭すに道を以てするも易からず。古語にいふ、智者は卷くべし。愚者は豪なり。と。信なるかな。

(大谷光瑞——無題録)

二一 新古今集の歌風

つらく思ふに新古今集は、古今集に比すれば、大差あるが如くなれども、その相接する撰集と並べ見るに、差異甚だしからず、その大いに古今集に異なるは、寧ろ金葉詞花の二集なるべく、千載集新古今集は却つて其の後を承けて、古今集の體にかへらんとせしものなり。故に險辭難語はつとめて之を避け、寧ろ詞は舊きを以てよしとすとして、三代集を庶幾せり。されば其の結果として、種々の特質を生出しぬ。第一に、本歌どりの歌、即ち古人の字句を取るもの多くなれり。これ一は復古の意と、一は意義を多からしめんの

意に出でしなるべし。

駒とめてそでうち拂ふかげもなし

佐野のわたりのゆきの夕暮

定家

は、萬葉集の、

苦しくも降りくる雨かみわの崎

さぬのわたりに家もあらなくに

によれるもの、之を本歌とれる歌の本と稱す。

眺むれば千々に物おもふ月にまた

わが身ひとつの峯のまつ風

長明

は、古今集の、

月見れば千々にものこそ悲しけれ

わが身一つの秋にはあらねど

千里

の敷衍なり。

定家

藤原氏、俊成の子、歌人、新古今集、新勅撰集の撰者

萬葉集

二十卷、大伴家持の撰といはれてゐる

苦しくも

長興磨の歌

長明

鴨氏、歌人、方丈肥の著者

千里

大江氏、延喜頃の人

かく古辭を尊んで、想は清新ならんことを期せり。然り、或點に於ては清新なる所もあるべし。されど大體に於て、陳腐にして蹈襲の弊を免れず。根本の思想において、殆ど新に添加する所なし。かくいへば、辭想共に昔を追うて、保守、因循何の取るべきなきが如しといへども、新古今集の特長は、前代をうけて練磨に練磨を重ね、能く舊想に新衣を着せて、清新なる體をなさしめしにあり。即ち難辭奇語を用ひざれども、能く語を練りて、言ひまはしの巧になれることこれなり。

さそはれぬ人のためとや残りけむ

明日よりさきのはなの白雪

良經

されど言ひまはし過ぎて、自ら意義の晦澁に陥れるものなきにあらず。知られじな同じ袖にはかよふとも

良經  
藤原氏。歌人

家隆  
藤原氏。歌人  
新古今集撰者

たがゆふぐれとたのむ秋風

家隆

語辭の彫琢また至れり盡せり。

たつた山夜半にあらしの松ふけば

雲にはうときみねの月かげ

通光

修辭の法には、色なきものに色をつけ、形なきものに形をあたへて、

ほとゝぎす深き峯より出でにけり

外山のすそに聲のおちくる

西行

など色々あれど、擬人の法を多しとす。

野原よりつゆのゆかりを訪ね來て

我がころもでに秋風ぞふく

後鳥羽院

かくして語辭の修練は、自ら簡單に詞をつゝめて、てには動詞等の省略を來たし、従うてまた名詞を多くするに至りぬ。

みよし野のたかねの櫻散りにけり

後鳥羽院  
第八十二代の  
天皇

通光  
姓は源。後深  
草天皇の時の  
太政大臣

有家  
藤原重家の子

嵐もしろきはるのあけぼの 後鳥羽院  
同時にまた漢詩などの調も加はりて、自ら切字多き歌加はりぬ。  
山かげやさらでは庭にあともなし

春ぞ來にける雪のむらぎえ 有家

さて思想の上より觀れば、先蹤を追うて、叙景のもの少なからず。  
殊に湖海の夕、また月などの詠多し。

なごの浦の霞のまよりながむれば

入目をあらふ沖つしらなみ 實定

しかれども大部分は依然として叙情にあること、和歌本來の通性に於て、ひとり此の時代のみ然らざるを得ざるなり。たゞ此の集代に未だ見ざる所なり。  
忘れじの言の葉いかになりにけむ

實定  
藤原氏。後徳  
大寺、歌人

宜秋門院  
源藏人頼行の  
女

たのめしくれば秋風ぞ吹く

宜秋門院

これや見し昔すみけむあとならむ

よもぎが露に月のかゝれる 西行

(藤岡作太郎)

二二 千遍讀

舊歳御狀相達し、御返書未だ仕らず候うち、新歳の芳翰又々相達し、忝く拜見仕り候。彌、御壯固に御重歳なされ候よし、欣慰この御事と存じ奉り候。此許相變らず、私儀無爲に罷在候。兩度共に御佳作御見せ下され、偕々御上京以後、別して御精出され候御事に御座候や、格別に御上達なされ候様に存じ奉り、珍重之に過ぎず候。詩は、**做多看多商量多**と申候。とかく多く御作りなされ、上手に御なりなさるべく候。商量の字、まづは人と相談することを申候へど

做多  
看多  
商量多  
考へ

我の心はかへて（一）  
すもよみ候もあはれ

筆蹟

夜の紅葉  
古里の人に見  
せばやもみじ  
葉の月にうつ  
らふ夜のにし  
きを  
述懐  
とやかくとお  
もひしことも  
くれたけの世  
のありさまの  
かたくもある  
かな  
雨森東

繁右衛門  
姓は古川、名  
は方久、對馬  
の國老

も、人と相談いたすばかりにては無之、心を以て心に問ひ、我が心に  
て思案する事をも商量と申候。俗話にも、人の申す事を承り、思案  
致し御返事申すべく候」と申候時は、「待我商量回話」と申候。和韻致

夜の紅葉

古里の人よみせしるるの  
月ようつらふ夜のみに  
は  
とやかくとおもひしことも  
くれたけの世のありさまの  
かたくもあるかな

雨森東

雨 森 芳 洲 筆 蹟

し進じ申候様に仰せ下さ  
れ候。此許逗留中は、一時  
の御挨拶と存じ、悪詩も作  
り申候へども、上方までは  
恥しく御座候て、のぼせが  
たく御座候。それ故和韻  
をば仕り申さず候、御宥恕

下さるべく候。こゝに一つをかしき話御座候故、書きつけ御目に  
かけ候、御笑ひ下さるべく候。  
去年より、繁右衛門杯皆々寄合ひ、歌の會を致し、間々私その座へ參

千遍

千遍讀

り候事も候へば、私にも、是非歌をよみ候へ」と申候へども詩は平仄  
なりと習ひ覺え居り候へど、歌は遂に百人一首の講釋をも承りた  
る事も御座なく、かなけりらむ、一つも埒は明き申さず候。其の上、  
歌詞としては尙々存じ申さず候につき、古今千遍讀と申す願を心に  
立て申候て、最早百五十遍は昨日までに讀みおほせ申候。今まで  
の積りに致し候へば、八十四の七月に、千遍の數滿ち申候積りに御  
座候。其の間に老耄致し候か、又は閻羅王より勾死鬼など遣はし  
申され候はば、仕るべき様も無之候へども、まづは願を満し候心に  
御座候。右千遍讀み候て、さて歌をよみかゝり候心に御座候。是  
は壽命の事はわきにのけ置きての分別に御座候へば、さりとはを  
かしき事に御座候。併し私最早世間に望ある者にもなく候へば、  
斯く致し死を待ち候も、一奇事と存じ立ち候事に御座候。此の段  
書付け御目にかへ候は、老人だにかく候事に御座候故、皆様にも御

年少に御座なされ候へば、尙々徒らに御暮しなされざるやう申上げた。此の如くに御座候。同志の御面々へ、御參會の節、此の旨御傳へなされ下さるべく頼み奉り候。申したき事も御座候へども、老筆堪へ難く、早々貴答に及び候。餘は後音を期し候。恐々謹言。

之は雨森芳洲の書  
（雨森芳洲）

雨森芳洲  
名は俊良、通稱東五郎。京都の儒者で對馬藩の儒臣となつた。寶永五年没、八十八歳

二三 梅花

いつであつたか、私は支那の雜貨を商ふ店に立寄つた。鉢を一つ求めようと思つたからだ。そこに居合はせた瘦せた客があつて、いろ／＼盆栽についての話をしてゐた。

「先生は、何がお好きですか。」

と、雜貨店の主人が、その客にたづねた。

「何といつても、まあ一莖一花の野梅だらうな。」

とその客は答へた。

私にはいつまでもその言葉が忘れられずに頭に残つてゐた。野梅の、あの針のやうな鋭い、雅趣に富んでゐることは、たしかに心を動かさずには置かない。箒を倒に立てたやうな枝の細さだ。大抵の梅は、根許で繼いである。盆栽にしてその花を眺めようとするには、どうしても繼いでなければ、花が早く咲かない。花が附くのに、古木のやうに半腐朽ちかゝつて、青苔や白苔のついた梅がある。そんなのは悪くはないが、眞の野梅で無いかぎりは枝が太い。そして枝數が疎である。野梅は前に言つたやうに、ちやうど針のやうな鋭い枝を持つてゐる。しかもそれが網の目をすかして見るやうに密生してゐる。盆栽になつた野梅の一鉢を前にすると、野趣が自から湧くのを覺



える。たとへ花は容易につかないとしてもたゞその影を見ただけで十分である。恐らく、これ程野趣に富んだものはないであらう。

ある植木屋が私に語つた事であるが、眞偽は分らないとして、

「甲州の石塊の澤山な川原を、山奥深く入つて行くのださうです。すると山に梅があつて、その實が岩と岩との間に落ちて、そこで芽をふいて、風に吹かれ、雪に壓されして、曲りくねつたのが、ほんたうの野梅です。」

と。この言葉は何れにしても面白い。そしてこの樹に對する一種のなつかしみをひかずにはおかない。

また園や野にある梅樹にも、盆栽にしたのとは別種な面白味がある。そこにほんたうの此の樹の有する獨得の野趣が見られるのだ。

伊豆に行くと、一月すでに白梅の散るのを見るのであるが、寒い北國では、三月の末になつて漸く蕾の頭が白むのである。

一時は、あの武骨な枝も、荒れた幹も、みんな雪の下になつてしまふ。そして人間は木の上を歩くことが出来る。季節が來ると、雪は次第に薄くなつて、足許から木々の枝が現はれて來る。私は子供の時分に過した北國の記憶を、永久に忘れることが出来ない。

町の湯屋に、母に連れられて、藁靴を穿いて、五六尺も積つた雪道を日暮方に歩いて行くと、あちらから村へ歸つて來る人に遇つたり、他の村へ行く群に出遇つたりする。しかしそれ等が行過ぎてしまつた後、あたりはたゞ一面の白い野原であつた。

「お母さん、もう柳の芽がこんなに赤くなつたのね。」

と、私は道端にやつと雪の下から頭を出した柳を見て言つた。

「もうぢきに暖かになるもの。」

と母は答へた。

頭を上げて遠くの空を見渡すと、いまにも泣出しさうな、うす暗く曇つた日だ。そこには何の晴々しい影も射さなかつたが、母の言葉はどんなに、冬の間、樂みの少い私の心に勇氣附けたか知れなかつた。

私は湯屋へ入つた。昔風の極めて陰氣な、穴の中にもぐりこむやうな風呂だつた。カンテラの火が、湯氣の濛々として立ちこめる中に、ぼんやりと點つてゐた。そのカンテラ、その火の傍に、梅の枝が二三本、繩で結んで、湯氣のよくかゝるところに吊されてあつた。もうその梅の蕾は白くなつてゐた。私はどんなにこの早咲きの梅の一枝が欲しかつたらう。しかしこれは持主があつて、湯屋に頼んであるので、妄りに手折ることが出来なかつた。

私は歸りに、あの赤い柳の芽のついた枝が欲しいと思つたが、それ

も、目先には見えるが、そこまで雪を冒して入つて行くことは、母にも私にもできなかつた。なんでもないことまでが、子供の時分には、自分の力では及び難い憧憬であつたのだ。またそれだけ、この自然は廣く美しく見られた。

東京へ來てからは、却つてしみじみと梅の花を見る機會がなくなつた。田舎に居た時分、東京はもう梅が咲く、といふ話に、少年雜誌の口繪で見た臥龍梅などを詩句に入れたり、歌によんだりした。しかし東京に來てから、私はまだ臥龍梅を知らない。よく電車の窓から濠端などに咲いてゐる梅を見たことはあるが、多くは街頭から捲起る砂塵に、その色が染つてゐる。時には月夜に山の手の高臺などを歩いて、垣根の内側に薰つてゐる梅の花に、思はず心を惹かれて佇立することはあつても、故郷に居た頃の、野に咲いたり、圃に咲いたりした野花の長閑さをしのぶに比すべくもないので

關西線  
名古屋、木津、  
奈良、淡町間  
月の瀬  
大和、伊賀、山  
城の三國界附  
近、名張川に  
そふ梅の名所  
主要部分は大  
和に屬す

料峭とは  
春の日の寒

ある。  
私は先年、京阪を旅行した時に、關西線で月の瀬の麓を通つた。近畿の山々は、ちやうど雨の降る日の車窓に迫つてゐた。私は見もしなかつた、知りもしなかつた梅花の名所を空想して、それを詩に作つたり歌に詠んだりした少年時代のことなどを思ひ出さざるを得なかつた。詩を作つた時分、はたとへば梅花に對しては、春寒とか料峭とか、花如雪とかいふ語句が、限らない詩情をそゝつたのであつた。  
私の知る限では、寒中雪を被つて咲くものに、寒木瓜、寒蘭、福壽草、支那水仙等があるが、中でも、梅が最も雄勁の感じを與へると共に、あはれも深い氣がする。  
黄昏西空の薄紅に茜さす時、青み渡つた空の下で白梅の薫るのはあはれふかいものである。人知らぬ間に、寒空の下で咲き、寒い風

小川未明  
小説家

に薫りながら萎むところに梅の強さと淋しさとがある。何物にも譲らない詩趣がある。「一莖一花の野梅」と言つた客の言葉に、私も同感する。  
(小川未明——中央公論)

二四 ヴェニス<sup>ヴェニス</sup>の法庭 その一

登場人物

公爵 (ヴェニスの市長)

アントニオ (ヴェニスの商人)

パッサニオ (アントニオの親友)

グレシャノ (ヴェニスの紳士。前記二人の友)

シャイロック (富有なジュデヤ人)

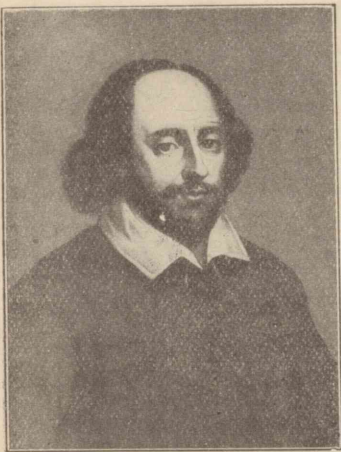
ポオシヤ (パッサニオの妻。若い法學博士を裝うて、この裁判をする)

ネリツサ (ポオシヤの侍女。グレシヤノの妻。法學博士に扮装したポオシヤの書記となつて法庭に出る)

公爵 アントニオとシャイロック。兩人とも前へ出い。

ポオシ シャイロックといふのは、其の方か。

シャイ シャイロックは手前でございます。



ヤービスクエセ

ポオシ 其の方の今度の訴訟は奇怪な訟ぢや。併し手續には何の不都合もないから、ヴェニス  
の法律の表として其の方を非難することは出来ん。——(アントニオに)其の方の生死は原告

に一任せねばならんのか

アント はい、さやうに申しをります。

ジウ  
ジユデヤ人。  
即ちシャイロ  
ックをさす

ポオシ 證書に對して異議はないか。

アント ございません。

ポオシ ではジウが慈悲を施さなければならん。

シャイ「ならん」とおつしやるのは、どういふ據ない理由がございませ  
すか。

ポオシ 慈悲は據なく施すべきものではない。慈悲は春の小雨の  
自らにして地を潤すが如くに降るものぢや。其の徳澤は二重  
である。慈悲は、之を與ふる者に取つても幸福なれば、受ける者  
に取つても幸福なのぢや。慈悲は最も大いなる人に在つて、更  
に最も大いなる美德となる。此の美德が君主の胸に在れば、其  
の光は金の冠にも幾倍する。彼の國王が手に持たせらるゝ笏  
は、ほんの俗界に於ける威力や尊嚴の標章たるに過ぎないが、慈  
悲は目に見えぬ心の中に宿る寶で、永世不滅の神の徳ぢや。隨

つて、慈悲を以て正義を和ぐるに及んで、政道が始めて天道に合ふのである。人間の力が、其の時はじめて神の力に似るのである。だからジウよ、お前は頻に正義といふことを主張するが、正義ばかりで以て裁判したなら、吾々どもの中、只の一人として救を得るものはあるまい。お互に且暮神に慈悲を祈る、其の心を推及ぼして他人に慈悲を施すのが人情といふものぢや。かやうに言葉を費すは、其の方の、正義一邊の申立を宥めようが爲である。それをお前が強ひて申張れば、ヴェニスの嚴格な法庭は、據なくそこにゐる商人に宣告を下さなければならん。

シャイ 手前が非分なれば、命をお取り下さい。手前は正義を要求します。證書通りの料金を要求いたします。

ボオシ 商人は金をえ拂はんのか。

パッサ いや、金は、わたくしが彼に代つて支拂ひます、元金の三倍に

いたしまして。若しそれで足りませねば十倍にもして支拂ひます、わたくしの手なり、首なり、心の臓なり、抵當にいたしましたも。それでも足らぬと申すやうでありますれば、正義呼ばりは表向で、底意は害心に相違ございません。願はくば政府の御權力を以て、大義の爲に、聊か法律を曲げられまして、此の人非人を御制肘下されたい。

ボオシ いや、それは出来ん。ヴェニス中の如何なる權力を以てするも、定まつたる國家の法令を改めることは出来ん。一度例を作ると、それが原で、種々の間違が續出して、長く國家のわづらひとなるからさういふことは出来ん。

シャイ ダニエル様の再來だ。全くのダニエル様だ。若いには似合はん恐れ入つた賢明な裁判官さんだ。

ボオシ どうか其の證書を見せてくれ。

ダニエル  
聖書に  
記される  
者西紀前  
百二十年  
傳へられ  
親族で、  
サレムに  
たれ

シャイはいく、これにございます、憚ながらこれにございます。  
ポオシ シャイ ロック、此の金額を三倍にして返済しようと申して  
居るぞ。

シャイ 誓言、誓言、手前は天帝に誓言しました。我がたましひに虚  
誓言の罪が負はされませうか。いゝや、それは、ヴェニス一國に  
代へても出来ません。

ポオシ さて、此の證書は、已に期限が切れてをるから、ヂウは之によ  
つて正當にその商人の胸元から肉一ポンドを切取る権利があ  
る。慈悲をかけてやれ。三倍の金を取つて、此の證書は予に裂  
かしてくれ。

シャイ 證書面通りの支拂さへ済みますればね。貴方はお立派な  
裁判官さんでおあんなさるらしい。法律をよく知つてお出で  
なさるし、解釋の仕方もしつかりしたもんだ。わしは貴方を立

派な國家の柱石だと思ひますから、其の法律を盾に、わしは貴方  
に言ひます、ずんぐ 裁判をなさい。魂をかけて誓言します、人  
間の舌の力では、わしの心を變へさせることは出来ません。是  
非證書通りに願ひます。

アン、わたしも切に願ひます、どうか御裁判下されますやうに。

二五 ヴェニスの法庭 その二

ポオシ では是非に及はん。其の方の胸へ彼が刃物を受ける準備  
をせい。

シャイ お、公明正大な裁判官。若いに似あはん偉い人だ。

ポオシ 蓋し此の證書面に認めてある科料は、法律の意義並びに目  
的上より見て、十分是認せらるべき性質のものである。

シャイ 全く其の通り。お、賢明な、公平な裁判官。まあ、お前

さんは、見かけよりは、ずつとく老成な偉いお方だ。  
ポオシ、それゆゑ、胸元を開け。

シャイ、はい、胸でございます。さう證書に書いてあります。でございませう。「すぐ胸

元より」と書いてござ  
います。

ポオシ、さやう。肉の重  
さを量るはかりはあ  
るか。

シャイ、準備してをりま  
す。

ポオシ、シャイ、ロツク、其の方自辨で外科醫者を呼寄せておけ。傷口をとめんと、出血の爲に命を失ふかも知れんから。

歐州名優の扮したシヤイ



シャイ、そんなことが證書に書いてございますか。

ポオシ、書いてはないが、その位の情は、かけるが當然ぢや。

シャイ、見附かりません。證書に見えませぬ。

ポオシ、商人、何か申し残すことがあるか。

アント、たゞ聊か。覺悟はとうに致してをります。パッサニオさん、お手を。御機嫌よろしう。わたしが貴方の爲に斯ういふ事

になつたからといつて、歎いて下さるな。運命の神が、わたしに對しては、まだしも親切にしてくれませぬ。不幸な人間を零落さ

せて財産に離れさせながら、一思ひに死なせもしないで、額に皺を湛へた凹んだ目で、吾と我が貧窮を眺め暮させるのが例であ

るのに、そのみじめさだけはまぬかれさせてくれます。どうぞ奥さんへよろしく。アントニオはどうして死んだか、どんなに

貴方を愛してゐたか、有體に懇ろにお話しなすつて、奥さんに判

斷して貰つて下さい。曾てバッサニオさんに一人の親友があつたと言へるかどうかを。貴方が親友を失つたと悔んで下されば、わたしは貴方の爲に負債を拂ふのを決して悔みません、其の證據には、ジウがずつと深く切れば、(笑を含みて)わたしは眞に全心を傾けて拂ふのです。

バッサアントニオ、わたしは今現に生命其のもの程に大切な妻を娶つてゐる。けれども、生命其のものも、その妻も、全世界も、わたしに取つては、お前さんの命以上に貴いものではない。わたしは何もかも棄て、しまふ、みんな犠牲にしてかまはないから、どうかしてお前さんを此の悪魔から救ひたいのです。

ボオシ(獨語のやうに) 若し細君が傍にゐて、さういふことをお前さんが言ふのを聞いてゐたら、餘り有難がりもすまいね。  
グレシ わたしにも妻があつて、それを非常に愛してゐるんだが、い

つそ死んで天國にゐたら、言傳をして神様に直訴して、此の狼のやうなジウの心を入替させて貰ふものをなあ。

ネリツサ(獨語のやうに) さういふことは、細君に聞えない處で言はないと、家庭に風波が起りますよ。

シャイ 基督教信者の男どもは皆あれだ。おれにも一人娘がある。基督教信者を夫に持たす位なら、強盜の血統の者に連添はせただ方がましだ。——時間が費えます。どうか御宣告を願ひます。

ボオシそこにある商人の肉一ポンドは其の方の物である。法庭が之を認めて、法律が之を其の方に與へる。

シャイ 公明正大な裁判官。

ボオシすなはち其の方みづから手を下して、彼が胸元から其の肉を切取らねばならんぞ。法律は之を許可し、法庭は之を是認する。



シャイ 最も博學なる裁判官……宣告だ。覺悟しろ。  
ポオシ ちよつと待て。まだ申すことがある。此の證書には血は  
只の一滴たりとも其の方に與へると書いてない。明瞭に「肉一  
ポンド」とのみ記してある。然る上は、證書面通り肉一ポンドを  
取れ。併しながら若し之を切取るに當つて、基督教信者の鮮血  
を只一滴でも灑ぐに於いては、其の方の地所も家財も、ヴェニス  
の國法によつて、悉く之をヴェニスの國庫に沒收いたすぞ。  
グレシ お、公明正大な裁判官。どうだジウ。お、博學なる裁判  
官。

シャイ それが法律でございますか。  
ポオシ 自身の目で其の條文を見るがよろしい。畢竟其の方がひ  
とへに嚴重な證書面通りの裁判を申し乞ふが故に、おのれが望  
み以上の、嚴重な裁判を受けなければならんのぢやと覺悟をせ

い。

グレシ お、博學なる裁判官。どうだジウ。成程博學なる裁判官  
さんだ。

シャイ では彼の申出通りにします。證書を三倍にして拂へば、あ  
の基督教信者を許してやります。

パツサ その金はこゝにある。

ポオシ 待て……ジウはあくまでも法律の明文通りの裁判を要求  
してゐるのである。待て。急ぐに及ばん。ジウは料料以外何  
物をも受取るべきでない。

## 二六 ヴェニスの法庭 その三

グレサ お、ジウ。公明正大な裁判官、成程博學な裁判官  
ポオサであるから、肉を切りとる準備をせい。血を流してはなら

んぞ、また肉は丁度一ポンドより以外、多くも少くも切取ること  
はならんぞ。若し聊かても、丁度一ポンド以上又は以下を切取  
るに於ては、よしそれが、たかが一分又は一厘ほどの軽重である  
としても、いや、只髪の毛一筋だけの量目の差を秤皿の上に生ず  
るに於ては、其の方の命は無いぞ、其の方の財産は悉く國庫に没  
收いたすぞ。

グレシ 今ダニエルさんだ、成程、ダニエルさんだ。 どうだ、罰當り、降  
参したらう。

ボウシ なぜジウは躊躇してゐる。 料料を取れ。

シャイ 元金だけを受取つて歸らせて貰ひたい。

バツサ とうから渡さうとしてゐるのぢや。 こゝにある。

ボオシ いや、彼は公の法庭に於てそれを受取らんと申したのであ  
る。 彼は只法律通り、證書通りの料料の外を受取ることとは相成

らん。

グレシ いよく、以てダニエルさんだ、今ダニエルさんだ。 おゝジ  
ウ、好い言葉を教へてくれて有難う。

シャイ 元金だけでも受取れませんか。

ボオシ 其の方が受取るものといつては、命がけて切取るべき料料  
の外にない。

シャイ では、うぬ、どうとも勝手にしやあがれ。 もう論判は無駄な  
こつた。

ボオシ 待てジウ。 其の方にはまだ法庭の御用がある。 ヴェニス  
市の法律によると、外國人が、直接若しくは間接の方法を以て當  
ヴェニス市民を殺さうとした場合に、それが露見に及べば、其の  
財産を二分して、被害者たらんとせし者は其の一半を取り、他の  
一半は國庫に没收する規定である。 さうして其の犯罪者たる

者の一命は、ひとへに公爵の御仁恕に任せ、何者もこれに對して異議を申し立てることの出来んことになつてゐる。其の方の罪狀は正にそれに相當する。直接又間接にそれにある商人の命を奪はんと企てたことが明瞭であるから、只今申し聞かせた罪科はまぬかれんぞ。であるから、速かに土下座して公爵の御慈悲をお願い申せ。

グレンシ 自分で首を縊つて死ぬ御許可でも願ふがいゝ。併し財産は悉く沒收されてしまふのだから、繩を買ふだけの餘裕もないだらう。だから政府の費用で以て首を縊めて貰はんければなるまい。

公爵 吾々の精神の其の方と異なることを知らせるために、願を聴くまでもなく、其の方の一命は赦してやる。さて財産は、一半はアントニオに取らせ、他の一半は國庫に收める。但し全く悔

悟すれば或は科料だけで差許すかも知れん。

ポオシ さやう、アントニオの分は格別として、國庫へお收めの分はさやういたしてもよろしう御座います。

シャイ いゝや、命も何もかも取つて下さい。赦して貰ふには及ばん。家を支へてゐる大黒柱を取られるのは家を取られるのだ。生活の資本を取られるのは命を取られるのだ。

ポオシ アントニオ、其の方は彼に對して何等かの慈悲を掛けてつかはす氣か。

グレンシ 無料で首縊る繩を一筋。其の他に何がやれるものか、あの罰當りに。

アント 憚ながら公爵閣下をはじめ御列席の方々へ、ジウが財産の一半は料料でお赦しになりますやう願ひます。残る一半は、若し當分の間手前に預け置き下さりますれば、満足にございま

す。右はジウの死後に至りまして、彼の娘夫婦に引渡すことに  
いたします。尙別に二ヶ條の願がございます。すなはち  
此の御仁恵に對して、彼が速かに基督信者に相成るといふこと、  
次に、死後一切の財産を娘夫婦に譲るといふ證書を此の法庭に  
於て認めまするやう、お言ひつけ願ひたう御座います。  
公爵 その通り申附けよう。もし否むに於ては、只今言ひ渡した  
赦免をも取消す。

ボオシ ジウ、よろしいか。 どうぢやな。

シヤイ よろしう御座います。

ボオシ 書記役、財産譲り渡しの證書を。

シヤイ どうかお暇を下さいます。 病氣にございます。 證書は後  
からお送り下さい。 宅で記名いたします。

公爵 歸つてもよろしい。 が、命令通りにいたせ。

グレンシ おい、洗禮を受けるには、立合人が二人要るぞ。 だが、若しお  
れが裁判官であつたら、立合人をもう十八ふやして、貴様を洗禮  
盤よりも絞首臺へつれていつたものをな。

(坪内逍遙譯——ヴェニスの商人)

坪内逍遙  
名は雄蔵。文  
學博士。英文  
學者。脚本、  
小説等の創作  
及び多くの翻  
譯がある。特  
に英國の戯曲  
家シェクスピ  
ヤの劇詩を譯  
したものは名  
高し

二七 曠乃誕生

東洋のほのぐと

女が世はらみそあよろり

くは曠のほまきつんて

けぞらふ、あつていふはん

くさやちやけき紅の

ひるまを 枝つゆ星や

やぶて乙女とならむがの

女が生ひはきの一ふせよ

朝風舞 ぬまわとく

遠より 雲井 神を 吹ま

證は 眼を らふ 驚き ごと

まづ 黎明を 呼びに きて

始り 朝の 扉に 上に

女が 初舞 ぬき 開く 時を

著る 破る つけ ぼの

草 け 花 よ まが つか ぬ

ぬき 温 潮は くる け した

ぬき 朝 子 ゆ あ み して

朝日 白 子 け ぬ ぞ あ

まじ 飛 ぬ 姿 ぶ ぶ

な づ ば 夢 の け ぼ れ

いかにいかに母を愛するに

思ふに涙もなまらぬ

そけいへいさ眼も

まじりか見んと涙あらん

まじり生れ来り世の中に

涙あもるもさかあり

空よ信しきまの心

なごもか早も暮あらん

行くすゑをいと生きたりて

いともれあふ重なりも

かゝるゆたさき船のこゑ

心のまじりづられ

(島崎藤村―藤村詩集)

島崎藤村  
名は春樹。新  
體詩人、小説  
家

二八 カルナバル祭

カルナバル祭は、パリ年中行事の一番の見物である。色紙を小さく丸く打抜いてカルナバル祭に投合ふものを、フランスではコンフェツチと呼ぶ。カルナバル祭には、小商人が袋に入れて大道で

リポリ街  
 パリ市中、テ  
 ユイルリー公  
 園の北東に沿  
 ふ通  
 テユイルリ  
 ー公園  
 リポリ街とセ  
 トヌ河とに挟  
 まれてゐる大  
 公園  
 コンコルド  
 場  
 パリ市中の廣  
 ルーヴル博  
 物館  
 テユイルリー  
 公園の東南に  
 ある

賣つて居る。それが凄じく賣れる。男も女もそれを抱へて出る。子供は子供同志、大人は大人同志、皆無邪氣にそれを投合ふ。この日一日は、人も犬も馬車もオートモビルも大道も家の中も、何から何までみなコンフェツチだらけになる。

私は晝飯を済すと直にリポリ街に出かけて、テユイルリー公園とこの街との仕切の鐵柵の高い石垣の上に腰かけて待構へた。公園の鐵柵はコンコルドからルーヴル博物館まで七八町は續いてゐるだらう。それが皆、二時間でも三時間でも待たうといふ我が黨の男女に占領されて隙間がない。

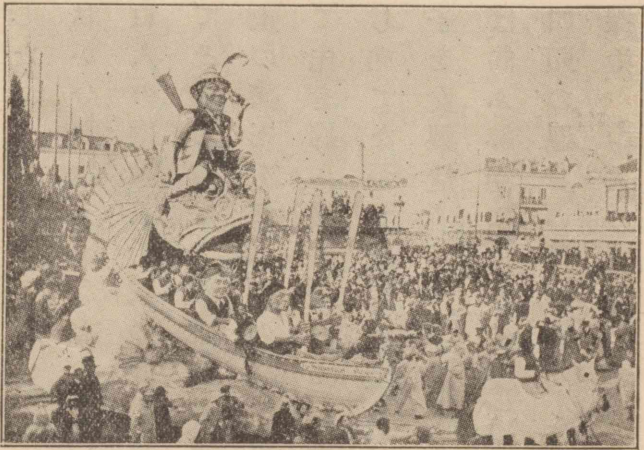
暫くすると見物がどよめき出した。喇叭の音が幽かに聞えてくる。行列がルーヴルの前まで來たといふ聲が起る。石垣に腰を掛けてゐた連中は皆鐵柵につかまつて立上る。樂の音が耳をつんざくやうに聞え出した。先登は、日を受けて金色に光り輝くジ

ズーアブ兵  
 アフリカの北  
 部アルゼリヤ  
 の兵隊。赤い  
 トルコ帽を被  
 り、赤いたつ  
 つけ袴の如き  
 ゆるいズボン  
 をはく  
 クック・ペ  
 アリー  
 共に米國人。  
 北極探検者

ヤンダルクの記念像の前を過ぎて、いよ／＼私たちの前に現れ出した。

私が今見物しようとする行列は、三十の山車、二十の花馬車、二千五百人の樂隊、三千人の假裝者、二百人の騎馬の男女等より成立つので、その目覺しさ、華やかさ、實に想像に餘るものである。中世の騎士の面影を偲ぶ、甲の後に長い毛を下げた市の衛兵三十名が、騎馬で先を拂ふ後に續いて、四十のズーアブ兵士が太鼓笛で賑かに囃し立てながら練つて來る。第一に現れた山車はおほきな流行帽子を女製造者が寄つてたかつて製へて居るところだ。日本ならば、向ふ鉢巻に勇みの姿で、人間が陽氣に引くところだが、こゝでは四頭の逞しい馬が悠々と引いて行く。つゞいて現れたのが北極探検。中央の北極が廻舞臺のやうに回轉し、クックとペアリーが互に後からピストルで狙合つて居る。北極の中心には、北極星を

エスキモト  
北米グリーン  
ランドなどの  
寒帯地方に住  
む一民族



カナルパル祭の山車

現したをとめが不滅の雪を象つた純白の衣を着て立ち、周囲の廻らぬ部分には、エスキモーや白熊などが配置してあり、その間に、ペンギン鳥に假装した人間が踊つて居る。その次に、夜と題した山車が来る。次には、飛行機が来る。その間に、多勢の假装者が樂隊に合せて、舞蹈の足取で進んで来る。これらの行列の間々を、<sup>エ夫</sup>意匠をこらした花馬車が彩る。花馬車には、いづれも女王と侍女とが乗つて居る。これらの女王は、國內の重なる町々の市場から選出された女で、女王の中の女王は、その女王等の中か

鳥羽  
あふる水  
空間  
内向のり  
E  
オム  
オム  
オム

ら選抜されたものである。女王の中の女王は、女王の中の女王の山車といふ特別のものに乗る。これが今日の行列の花である。今年、女王の中の女王の山車は、ギリシヤ神話にある羽の生えた金色の天馬が、空間の征服の爲に、「青春」を導いて空中を奔るといふ意匠に成つたもの、女王は青春の象徴で、二十世紀の文明は空間を征服するにあることを表したものであつた。

女王の花馬車の過ぐる處、人は女王を目掛けてコンフェツチを投げかける。花馬車の中の花に埋るゝ人も、やがてはコンフェツチの中に埋まるかと思はるゝばかり。あゝ、興ある風情ではある。中にも、私が忘れ得ぬまで瞬間の美に打たれたのは、女王の中の女王の山車の行過ぐる時、向側に立並ぶ家の二階・三階の欄干に集つた娘等が、この山車目掛けてまき散らすコンフェツチの、女王の玉座に、金色の天馬に、さては十二人の侍女の色衣の上に、空より亂れ



菊池幽芳  
名は清。小説家、文學者

降る天花の如く散りかゝる光景であつた。

(菊池幽芳——幽芳集)

大正女子國文讀本 卷八終

大正十四年一月十日	大正十四年一月五日	大正十四年九月十日	大正十四年九月廿五日	大正十四年九月廿八日	大正十四年九月廿八日
第二修正訂正發行	第二修正訂正發行	第二修正訂正發行	第二修正訂正發行	第二修正訂正發行	第二修正訂正發行

大正女子國文讀本第二修正版 全拾冊  
卷八 定價金參拾貳錢  
大正十四年九月十日



著作  
所有

著者

發行者

印刷者

東京市外野大塚千六百二十五番地

東京市牛込區白銀町貳拾九番地

會社 資育英書院  
右代表者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

目 黒 甚 七  
根 本 力 三

印刷所

株式會社 秀英舍

發行所  
發賣所

東京市牛込區白銀町二十九番地  
振替口座(東京)七四二番

東京市京橋區南傳馬町二丁目  
振替口座(東京)二八〇九番

會社 資育英書院

目 黒 書 店

新刊西學年

大和隆子

